

丹波市

# 伝平等寺跡遺跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日・和田山道路I）建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

平成21（2009）年3月

兵庫県教育委員会

丹波市

# 伝平等寺跡遺跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日・和田山道路I）建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

平成21（2009）年3月

兵庫県教育委員会



調査前の遺跡全景（西から）



遺跡全景 上層検出状況（西から）



遺跡全景 下層検出状況（西から）



礎石建物全景（南から）

## 例　　言

1. 本書は丹波市青垣町徳畑に所在する伝平等寺跡遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載する伝平等寺跡遺跡の調査は国土交通省近畿地方整備局（旧建設省近畿地方建設局）兵庫国道事務所が進める、一般国道483号春日和田山道路Ⅰ事業に伴い実施した。
3. 本遺跡の確認調査は平成13年度、全面調査（当時は本発掘調査）は平成14年度に実施した。
4. 調査で使用した方位は国土地標系第V系を使用した。標高値は東京湾平均海面（T. P.）を基準とした。
5. 遺構図・土層断面図などは調査員が実測した。調査区全体図（1/50縮尺）は写測エンジニアリング株式会社に委託して図化した。
6. 遺構写真は調査担当者が撮影した。その他、空中写真は写測エンジニアリング株式会社に委託した。
7. 整理作業は平成20年度に行った。詳細は第1章に記載した。
8. 本書の執筆は山上雅弘が行い、編集を山上が担当し、伴　悦子の協力を得た。
9. 本章掲載の遺構写真は調査員が適宜撮影したものである。遺物写真的撮影は㈱タニグチフォトに委託して行った。
10. 足立元二氏所蔵文書の転記については芦田岩男氏（丹波市立猪野記念美術館）に依頼した。ただし、掲載内容については当館にその責がある。
11. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中500）ならびに魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。
12. 本書を執筆するにあたって、以下の地元関係者および、関係機関、個人からご協力・ご指導を頂いた。記して感謝したい。（順不同・敬称略）  
　　水上郡教育委員会（現丹波市教育委員会）・足立元二・芦田岩男・徳原多喜雄

## 凡　　例

1. 本書で使用した遺跡分布図などの地図については、国土地理院発行の1/200,000「鳥取・宮津・姫路・京都及大阪」を使用した。挿図第1図は国土地理院発行の1/25,000「矢名瀬・大名草・福知山西部・黒井」を使用した。また、図版2は旧水上郡青垣町発行の1/2,500「青垣町全国No5・No10」を使用した。
2. 遺物は須恵器を黒焼り、土師器を白抜きとし、遺物番号は図版・写真図版とともに統一を図った。
3. 土層の色調および土器の色調については小山正忠・竹原秀雄編著『新版　土色帖』1992年版を参照して記述した。

## 伝平等寺跡遺跡

一般国道485号北近畿豊岡自動車道（春日・和田山道Ⅰ）

建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

例　　言

凡　　例

## 目　　次

第1章　調査の経緯と調査体制	1
1. 本発掘調査にいたる経緯	1
2. 出土品整理作業	2
第2章　遺跡をとりまく環境	3
第3章　調査の成果	5
第1節　概要	5
第2節　上段地区的調査	5
第3節　下段平坦面の調査	7
第4章　出土遺物	13
第1節　遺物概要	13
第2節　上段地区的遺物	14
第3節　下段平坦面の遺物	14
第4節　小結	18
第5章　まとめ	25

図版

写真図版

報告書抄録

## 卷頭図版目次

- 卷頭図版 1 上 調査前の遺跡全景（西から）・下 遺跡全景 上層検出状況（西から）  
卷頭図版 2 上 遺跡全景 下層検出状況（西から）・下 碓石建物全景（南から）

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	0
第2図 出土土師器	2
第3図 溝査中の伝平等寺跡遺跡を麓から望む	2
第4図 平等寺現況	4
第5図 再建された平等寺の小祠（西から）	4
第6図 武大神社	4
第7図 山垣鏡から望んだ山垣城	4
第8図 小石垣平面図（1/30）	6

## 表目次

表1 伝平等寺跡遺跡 遺物観察表1	21
表2 伝平等寺跡遺跡 遺物観察表2	22
表3 伝平等寺跡遺跡 遺物観察表3	23
表4 伝平等寺跡遺跡 遺物観察表4	24

## 図版目次

図版1 調査区周辺の地形（1/5,000）	
図版2 伝平等寺跡遺跡周辺の主要遺跡（1/35,000）	
図版3 伝平等寺跡遺跡周辺の主要遺跡一覧（1/5,000）	
図版4 伝平等寺跡・土井遺跡（1/2,000）	
図版5 調査区現況地形図（1/300）	
図版6 調査区全体図（1/300）	
図版7 上段遺構平面図（1/200）	
図版8 上段 挖立柱建物跡（1/100）平断面図・上坑（1/40）平断面図	
図版9 上段地区 土坑（1/40）平断面図	
図版10 下段平坦面 上層平面図（1/100）	
図版11 下段平坦面 下層平面図（1/100）	
図版12 下段平坦面 土層断面図1（1/60）	
図版13 下段平坦面 土層断面図2	
図版14 下段平坦面 下層礎石建物跡（堂舎）平面図（1/50）	
図版15 下段平坦面 下層礎石建物跡（堂舎）断面図（1/50）	
図版16 下段平坦面 下層溝断面図（1/40）・土坑平断面図（1/20）	
図版17 下段平坦面 下層土坑平断面図（1/20）	
図版18 出土遺物 土器1	
図版19 出土遺物 土器2	
図版20 出土遺物 土器3	
図版21 出土遺物 金属製品	

## 写真図版目次

- 写真図版1 遺跡遠景 上 南から・下 西から
- 写真図版2 遺跡遠景 上 北西から・下 西から
- 写真図版3 遺跡近景 上 西から・下 南から
- 写真図版4 遺跡全景 上 下段下層検出（北から）・下 下段下層検出（南から）
- 写真図版5 遺跡全景（真上から）
- 写真図版6 上段地区 上 遺構検出状況（北から）・下 遺構検出状況（南から）
- 写真図版7 上段地区 上 柱穴群検出状況（東南から）・下 掘立柱建物跡（東から）
- 写真図版8 上段地区
- ①石垣（南から）・②石垣（西から）・③SK33（南から）・④SK35（南から）  
⑤SK40（北から）・⑥SK48（南から）・⑦SK46（南から）
- 写真図版9 下段平坦面上層  
上 全景（南から）・中 全景（北から）・下右 碓石a・下左 碓石b
- 写真図版10 下段平坦面上層 碓敷き  
上 北から・中 東から・下右 南西部細部（北から）・下左 南東部細部（南から）
- 写真図版11 下段平坦面下層 上 全景（南東から）・下 堂舍全景（南から）
- 写真図版12 下段平坦面下層 上 堂舍全景（北から）・下 堂舍近景（南から）
- 写真図版13 下段平坦面下層 上 堂舍近景（北から）・下 堂舍近景（東から）
- 写真図版14 下段平坦面下層 上 堂舍礎石近景（南から）・中 堂舍西側石列（南から）  
下右 SD3断面A-A'（南から）・下左 SD3+4断面B-B'（南から）
- 写真図版15 下段下面 ①礎石1（南から）・②礎石2（南から）・③礎石3（南から）  
④礎石4（南から）・⑤礎石5（南から）・⑥礎石6（南から）・⑦礎石7（南から）
- 写真図版16 下段下面  
①土器a出土状況（南から）・②土器a出土状況近景（南から）・③SD3土器出土状況（東から）  
④SK10・11（南から）・⑤SK19（北から）・⑥SK22（北西から）・⑦SK23（北から）  
⑧SK24（西から）
- 写真図版17 下段土層断面  
①断面1下層の断面（面から）・②断面③（面から）・③断面①12~14層周辺（面から）  
④断面2（西から）・⑤断面④上端（面から）・⑥断面④下端（面から）
- 写真図版18 調査風景など  
①雪に埋もれた伝平等寺跡遺跡・②雪かき作業・③重機掘削風景  
④下段平坦面作業風景・⑤写真尼場設置風景
- 写真図版19 出土土器1
- 写真図版20 出土土器2
- 写真図版21 出土土器3
- 写真図版22 出土土器4
- 写真図版23 出土土器5
- 写真図版24 出土土器6
- 写真図版25 出土土器7
- 写真図版26 出土金属製品



第1図 遺跡の位置

# 第1章 調査の経緯と調査体制

## 1. 本発掘調査にいたる経緯

国土交通省近畿地方整備局（旧建設省近畿地方建設局）兵庫国道事務所が進める一般国道483号春日和田山道路事業に伴い、平成3年度以降、兵庫県教育委員会においては工事対象範囲の埋蔵文化財について調査を随時実施してきた。調査は平成3年度に路線全域の分布調査を実施し、その結果を受け、平成12年度・13年度には確認調査を実施して、埋蔵文化財の存否を確かめると共に、遺跡範囲や内容の把握に努めた。その後、これらの成果を元に平成13～16年度に本発掘調査を逐次実施している。

### 【分布調査・確認調査】

平成3年度に計画路線内のうち、氷上郡春日町（現丹波市春日町）から同青垣町遠阪にかけて、即ち、近畿舞鶴自動車道春日インターチェンジから遠阪トンネルの区間約24.4kmについて分布調査を行った（遺跡調査番号910019）。ただし、今回報告する伝平等寺跡遺跡は土井遺跡の調査時に新たに発見された遺跡である。この発見を受けて平成13年度に確認調査（遺跡調査番号2001242）が行われた。調査期間は平成14年3月19・20日の2日間である。

伝平等寺遺跡は徳畠に在住の足立元二氏のご教示によると、「徳畠の東はずれに位置した平等寺と呼ばれる寺院は、江戸時代の文化年間（1804～1817）まで背後の山の上（伝平等寺跡遺跡の場所）にあった。しかし土砂崩れのために山の上から麓の寺域に移動した。」（図版4参照）という。この聞き伝えから遺跡名を伝平等寺跡遺跡としている。

### 【本発掘調査】

本発掘調査（遺跡調査番号2002142）は平成15年1月20日～3月19日の期間に実施した。積雪の載しい季節であったが、関係各位の努力によって無事調査を終えることができた。調査面積は1,455m<sup>2</sup>である。この調査では同時に田ノ口遺跡の調査も実施しており、作業は並行して行なった。

作業に当たっては表土層を重機掘削で除去し、下層を人力掘削で廃土した。面検出や遺構掘削はすべて人力で行い、掘削作業後、写真撮影および実測図を作成して現場を記録した。

なお、航空測量は写測エンジニアリング株式会社に委託しておこなった。航空写真的撮影は調査前の現況測量（1/100）・上層・下層（1/50）のそれぞれの段階で実施し、記録保存をおこなっている。航空撮影の実施日は1回目が平成15年1月21日、2回目が平成15年2月19日、3回目が平成15年3月10日である。

現地調査は確認調査を主査別府洋二・主査西口圭介の2名、本発掘調査を主査別府洋二・主査山上雅弘・主任松岡千寿（現兵庫陶芸館・主査）の3名が担当した。（職名は現地調査当時）

この他、調査期間中の3月16日に一般の方を対象に現地説明会を開催した。当日は地元の方を中心に70名の方に参加していただき、遺跡の成果を公表している。

## 2. 出土品整理作業

平成14年度に現地において遺物洗浄及びネーミングの一部を行った他は、平成20年度に兵庫県立考古博物館において実施した。

出土遺物の作業は、先ず接合・補強を行い、実測や拓本・写真撮影のための選択など事前作業を実施した。その後、遺物実測・土器の復原・遺物の写真撮影などを行い、次にレイアウト・トレースと作業を進め報告書掲載のための資料を作成した。

また、遺構についても同時に作業を進め、遺構図はトレースが行えるように、現場で作成した実測図を補正し、レイアウト作業、トレース作業へと手順を進めた。金属製品についても作業を進め、処理作業、写真撮影を行い報告書掲載のための資料を作成した。なお、金属製品の一連の作業についても平成20年度内にすべて実施している。

これら一連の作業の後、総集作業を行い本書を刊行した。

整理作業は職員の山上および以下の体制で行った。

実測・トレース 非常勤嘱託員 伴 悅子

接合・復元 非常勤嘱託員 西口由紀・島村順子・藏幾子・奥野政子・荒木由美子

藤池かづさ・吉村あけみ



第2図 出土土築器



第3図 調査中の伝平等跡遺跡を麓から望む

## 第2章 遺跡をとりまく環境

伝平等寺跡遺跡は兵庫県丹波市青垣町徳畠に所在する。遺跡が立地する地点は遠阪川東岸の小丘陵上で、平成13年度に本発掘調査が行われた、丘陵縦の土井遺跡とは隣接する位置関係にある。

丹波市（旧氷上郡）青垣町は、兵庫県丹波市（旧氷上郡）の最北西端部に位置し、遠阪峠を隔てて旧但馬国（朝来市）と境を接する。遺跡が位置する遠阪周辺は谷地形となり、谷の中央を栗鹿山に源を発する遠阪川が流れる。

本遺跡周辺の歴史的・地理的環境については「兵庫県埋蔵文化財調査報告書第341冊 土井遺跡」（兵庫県教育委員会2008）に詳しい。そのためここでは遺跡に関する記述のみを記すこととする。

遠阪地区は、江戸時代には遠坂村と呼ばれ、明治時代には遠坂村・山垣村と合併し遠坂村となっていた。この遠坂村の主部は遠阪峠の麓から遠阪川が南流してゆく全長4kmたらず、幅300m程度の狭隘な谷内である。この谷は遠阪谷と呼ばれている。因みに、「とおさか」は3ヶ村を含む広域の範囲である谷全域あるいは峠を表記する場合には「遠阪」の字を用い、峠麓の集落のみを指す場合には「遠坂」の字が当てられている。

中世前期には、佐治郷を継承して佐治荘が成立する。佐治荘の成立年代・本家・領家などは不明であるが、貞和五年（1349）十一月二十七日の『大德寺領諸荘園文書目録』の追記によれば、文和四年（1355）には佐治荘内の吉宗名が大德寺領であったことが見え、同荘の主要部は遠阪谷にあったといわれる。

旧氷上郡内全域の遺跡については、氷上郡教育委員会発行『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書（4）－兵庫県氷上郡青垣町』（1997）・『プラ山・ボラ山』（1995）・兵庫県教育委員会発行『七日市遺跡』・『市辺遺跡』・『横田遺跡』・『沢野遺跡』・『城之腰遺跡』など既刊の北近畿自動車道建設関連の報告書に詳しく、本報告では多くを触れない。

周辺の遺跡については、分布地図と一覧（図版2・3）を上げておく。

平安時代の遺跡は沢野遺跡・土井遺跡・田ノ口遺跡・伝平等寺跡遺跡・平野遺跡などがあげられる。遠阪谷では、田ノ口遺跡・土井遺跡・平野遺跡が何れも10世紀頃より集落を形成し、中世へと続く遺跡である。これらの遺跡からは綠釉陶器などの官衙的な遺物が出土しており、土井遺跡では工房址、田ノ口遺跡では経塚や屋敷墓を伴っており、開発領主や有力農民の住居とされる。

中世の遺跡としては10世紀から続く上記の遺跡のほか、山垣館・伝平等寺跡遺跡（12世紀から）などがある。山垣館は13世紀に佐治荘へ関東から入部した足立氏の拠点と伝わる。足立氏は関東で培った湿地開発の技術によって周辺（字蛇湿などの地名が残る）を開発していくと考えられる。ただし、居館そのものの成立は戦国時代以降と推定される。また、本書で報告する伝平等寺跡遺跡は隣接する土井遺跡と密接な関係をもつ寺院遺跡である。

土井遺跡は、在地有力者の住居を指す土居に通じる『土井』や『カイチ』、用水管理に関わる『湯落ち』などの莊園地名をもっており、田ノ口遺跡と並び、中世佐治荘の主要な集落遺跡であったと考えられる。また、伝平等寺跡遺跡の寺院は土井遺跡の集落とは密接にかかわると推定され、在地に縁の薄い莊園領主などとは関係をもたない寺院と推定される。

戦国時代になると遠阪の谷中には山城が多数築城される。遠阪城跡・田ノ口城跡・湯落ち城跡・中ノ谷城跡・松倉城跡・鳥帽子山城跡・山垣城跡・山垣館跡・中佐治城跡などが知られる。このうち山垣城跡

と山垣館跡はこの谷の中核となった城館で、足立氏が城主とされる。山垣城跡では南の尾根の一角に掘切・横堀に囲まれた郭があり、さらに斜面には堅堀を設けるなどや發達した構造を持つ。山垣館跡は堀之内と呼ばれ堀跡を囲繞した方形の区画が残り、発掘調査で堀跡が確認されている。

また、城館のうち烏帽子山城は標高512.5mの高所に位置し、他とは隔絶した立地となる。永禄5~7年（1562~64）頃、この城は内藤宗勝と丹波の領主との争いの場となる（九月一九日「内藤宗勝書状」夜久文書）など、国の境目の城郭として位置づけられ、遠坂の谷中の領域を超えた城郭として機能していたようである。他の山城は集落背後の丘陵に位置し、谷中への眺望が良好な場所に立地する。ほとんどが単郭で前後を堀切などで塞いだ単純な構造である。おそらく在地に根ざした遺構の可能性が強いであろう。これらの城郭は戦国時代の終焉と共に役割を終え、廢城となる。

現在の徳畠集落は伝平等寺跡遺跡の西対岸に中心集落があるが、他にも伝平等寺跡遺跡麓などいくつのかの集落が遠阪川を挟んで点在している。村内に寺はないが、東側の谷中に武大神社が鎮座する。この神社は宮一神社・稻荷社を合祀するもので、3社がそれぞれの小さな社殿を持つ。また、伝平等寺跡遺跡周辺にはもともと村の墓地が集中していたが、道路建設に伴って武大神社手前に移された。徳畠村については多くを語る史料はないが、現在では牡丹の郷を地区のキャッチフレーズにする。なお、本文は土井遺跡の第1章を抜粋し、一部改変したものである。

引用文献 兵庫県教育委員会『土井遺跡』2008



第4図 伝平等寺跡遺跡現況



第5図 再建された平等寺の小祠（西から）



第6図 武大神社



第7図 山垣館から望んだ山垣城

## 第3章 調査の成果

### 第1節 概要

伝平等寺跡遺跡は集落背後の標高190～200m（比高25m前後）の丘陵上に立地する。調査区は緩斜面である上段地区と下段平坦面の2地区からなる。上段地区は標高193～200前後の緩斜面に位置する。周辺は調査区東側を南側に下る尾根筋から緩やかに南に向かって傾斜する。尾根の背から西側には調査区の西側から急斜面となる。下段平坦面はこの尾根筋上に立地しており、ほぼ南を向いた形で形成される。

調査の結果、上段地区では中世の掘立柱建物・柱穴・土坑・溝などが検出され、下段平坦面では寺院に関連する礎石建物や集石・土坑・溝などが検出された。ただし、下段平坦面では土砂崩れによって2面の造構面が確認された。このうち礎石建物は下段平坦面の下層造構面において検出されたもので、出土遺物から中世前半段階のものであることが判明した。

### 第2節 上段地区の調査

上段地区では掘立柱建物1棟（SB1）・柱穴・段状造構・土坑が検出された。土坑は梢円形ないし不定形のもので、多数検出されているが、樹根の抜き取り土坑の可能性のあるものも含まれている。このため、本稿では主なもののみを紹介する。

#### SB1・柱穴群（図版7・8、写真図版7）

調査区の南端付近で検出されたもので、2間×2間（6.2×6.2m）の小規模な掘立柱建物跡である。下段に向かって緩やかに傾斜する場所に建てられるもので、建物造成に伴って周囲を造成した痕跡は認められない。柱穴は直径15～30cm前後、深さは10～20cm前後である。構造は簡素なものであるため住居ではなく、小屋的な建物と考えられる。

さらに、SB1周囲には同規模の小規模な柱穴ないしピットが多数検出され、これらはSB1と同じく、下段平坦面に隣接する場所に集中している。このため、SB1の1棟のみではなく何棟かの建物が存在した可能性がある。また、遺物を伴う造構がないため時期の詳細は不明であるが、状況からするとこれらの柱穴はSB1と共に中世のものである可能性が高い。これに従えば、SB1・柱穴群は下段平坦面の建物建築に伴う作業小屋ないし、この建物に付随した建物の痕跡である可能性がある。

#### SK30・31（図版7・9、写真図版5・6）

調査区北端に並んで検出された土坑である。SK30は平面円形で長さ1.3m、深さ0.3m、SK31は平面不定形で最大の長さ1.45m、深さ0.2mを測る。

#### SK32（図版7・9、写真図版5・6・8）

調査区中ほどで検出された土坑である。平面は不定形、長軸1.25m、深さ0.23mを測る。

#### SK33（図版7・9、写真図版5・6・8）

調査区北寄りで検出された土坑である。大型の土坑で平面は不定形、長軸2.3m、深さ0.4mを測る。

#### SK35（図版7・9、写真図版6・8）

調査区中央付近で検出された土坑である。平面円形に近い形状で長軸1.3m、深さ0.15mを測る。

#### SK40（図版7・9、写真図版6・8）

調査区は調査区中ほどで検出された土坑である。平面円形で直径1.38m、深さ0.2mを測る。

SK43 (図版7・9、写真図版6)

調査区西南寄りで検出された土坑である。平面不定形で長さ1.3m、深さ0.2mを測る。

SK46 (図版7・8、写真図版6・8)

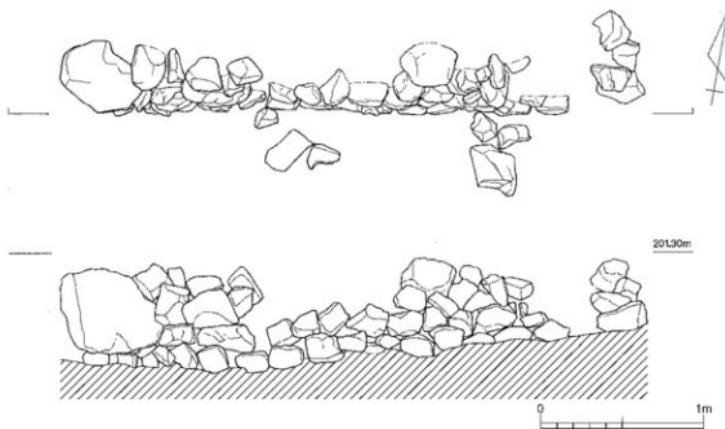
調査区西南端斜面で検出された。斜面を削って全部に土砂を盛りだす構造である。土坑としたが建物を建てるための段状遺構の可能性がある。規模は長さ5.3m、幅2.3mを測る。遺構内底面には炭痕跡が顯著で、土師器細片が出土（未実測）するなど、微細ながら生活痕跡を残す。このため、下段平坦面に関連するもの可能性がある。

SK48 (図版7・9、写真図版6・8)

調査区南端、下段平坦面との境付近で検出された土坑である。平面長楕円形で長軸2.2m、幅1.2m、深さ0.38mを測る。

小石垣 (図版7・第8図、写真図版8)

調査区の北東隅、調査区外に検出された石垣で、長さ3.6m、高さ0.6m前後の規模である。拳大から人頭大の石材を用いるが、西端の1石は0.6m前後の大型のものである。時期は不明であるが、小祠などの基壇のために構築されたもの可能性がある。



第8図 上段地区小石垣断面図 (1/30)

### 第3節 下段平坦面の調査

下段平坦面は全体の西側半分を調査した。平坦面は調査区の範囲では東西20m、南北13mの規模で、背後に4m前後の崖面を持つ。測定区外の地形も含めると規模は東西25m、南北13~14m前後、面積350m<sup>2</sup>前後となる。標高は上層で189.6~191.0m、下層で189.6~190.0mである。

この平坦面は前述のように尾根上に立地するが、この場所は尾根の端部にあたり、南麓側への斜面は急傾斜地形に変わっている。このため麓から望むと平坦地は、集落背後から間近に見上げる高い位置になる。

下段平坦面は中世前半に形成されたと考えられるが、近世の土砂崩れによって遺構面が埋没している。このため、現在の地表面はこの上層にある。ただ、地表面には遺構が検出されないため、近世に平等寺が移転した後は堂舎などが存在しなかったと思われ、伝承を検証することができた。さらに13世紀段階にも土砂崩れに見舞われていることから、都合2回の土砂崩れによって2面の遺構面が形成されたことが明らかになった。このため、本稿では1回目の土砂崩れ直下の遺構面を上層遺構面、2回目の土砂崩れの面から下層を下層遺構面と呼称して報告を行うこととする。

まず、各個別遺構の説明を行う前に変遷過程について説明しておきたい。記述に当たっては図版12の断面図①を主として用いながら説明する。

〔0段階〕表土層である。現況地表面ではビニール製の花立や手水鉢などが見られ、何らかの信仰の場所であったと推定されるが、建物などは存在せず詳細は不明。

〔1段階〕1回目の土砂崩れ前の遺構面、上層遺構面である。最も新しい堆積（土砂崩れ）が、1層下の2~9層の土砂である。これらの土砂を除去し、11・12・3'層上面を遺構面とする面が、下段平坦面上層である。つまり、近世の平等寺が建った時期を最終期とする遺構面で、この土砂崩れの後、寺院は麓に移転したのである。この面からは礎石・石敷遺構（石敷きの様は主として3'・11・12層上面ないし層中から検出）などが検出された。ただし、礎石（礎石は層上面に据えられる。）は建物の復元には至っていない。

なお、この面からは後述のように、中世前半の土器が多く、礎敷内部にも混入している。この一方、近世時期の青磁皿（4）は屢々上面で1点検出された。このため、この面の機能した期間は中世前半（13世紀）から近世の期間と考えた。また、礎敷や検出された礎石については、出土土器の状況から13世紀前半段階に帰属する可能性が高い。

〔2段階〕2回目の土砂崩れの前の面で、下層遺構面の上層である。さらに、断面図①では背後の崖地形に沿って10~18層が上砂崩れによって堆積したと考えられる。10・15~18層は併行に堆積するが、崖面から崩れた土砂がそのまま落ち込んだものである。そして、層間の土質・色調の差は、地山層の土砂の目地の違いがそのまま反映したものである。また、平面図に表現した（断面図①では4'・4"層）平坦地の崖面際に見られる溝状の地割れ地形は、土砂がずれたことによって生じた陥没である。堆積層を観察すると溝にみえるが、この地割れの崖面との接地面が下層まで続いている。あきらかに土砂崩れによるものであることがわかる。この土砂崩れの土砂の単位は壁際のごく一部のみに残されるが、さらに11~14層についても土砂崩れ後山側を削って地均しした土砂の可能性がある。

その下層で礎石建物が検出されたのは、礎石天端やこれに平行するSD3のレベルから考えると19層上面と考えられ、この層の上面が遺構面となり、礎石建物やSD3が機能した時期と考えられる。

〔3段階〕下層遺構面の下層で、平坦地創建時の遺構面である。19層を除去し、地山面の直上にも遺構が検出される段階がある。この段階は後述するとおり、前身建物とSD4の機能した時期である。

以上の過程を、断面②・③でも確認しておきたい。まず断面②では13・14層を除くすべての層が土砂崩れによるものと思われ、1～8層が上層の土砂崩れで9～12が下層の土砂崩れの可能性がある。ただし必ずしも明確に差があるわけではないので、2回の土砂崩れについて断面①ほど明瞭にはできない。なお、13・14層はSD3の埋土であるが、堆積土は崖面から流入している。おそらく、崖面の流水と共に埋まったのである。さらに、その後に土砂崩れが発生し完全に溝は埋まってしまう。

断面③でも2回の土砂崩れの過程を検討することは困難である。並行関係で言えば、11層上面が断面①の19層上面に対応する。11層上面は南側（断面図右端）で段差が付いて、南側ではほぼ水平となる。この面に礎石建物の礎石が据えられるため、2段階となる。下層が3段階、土砂崩れは2～10層でおそらく2段階の終わりに発生したもののが残されていると考えられるが詳細は不明である。

以上の経過がたどれるが、これらを整理し、対応関係を述べると、0段階は近世から現代まで、1段階は出土遺物から伝承による安政期の山崩れによって退転した平等寺の段階と推定される。2・3段階は中世前半で、2段階が礎石建物の存在した段階、3段階がそれ以前の段階、つまり後述する前身建物の段階である。

## 1. 上層遺構面（図版10・16、写真図版9・10）

下段平坦面の上層遺構面（1段階）は近世まで平等寺が存在したが、前述のように麓に移転したといわれる。この遺構面は今回の調査によって、13世紀の土砂崩れによって流失した土砂の上に遺構面が形成されていることが確かめられた。

### 礎敷（図版10、写真図版9・10）

上層遺構面では拳大の角礎を敷き詰めた遺構が検出された。確認調査で中央が寸断されるが、南側の礎敷1と、北側の礎敷2の2箇所がある。

礎敷1は東西に長く分布するもので東西方向に6m、南北方向に最大で1.9mの範囲で礎が敷き詰められていた。概ね拳大前後の角礎で大きいものは一部人頭人のものも混じる。厚さは20cm程度に及ぶ箇所も見られるが、1石のみの箇所もあって一様ではない。全体的な傾向としては北側から南側にやや傾斜して堆積する。

礎敷2は平坦地山側の土砂崩れによる傾斜面際で検出された。東西に3.5m前後、南北1.2m前後で東西に長軸を持つ長方形状に検出された。

それぞれの検出面は、礎敷1が3層の上面および層中に検出され、北側の礎敷2は1回目（中世前半）の土砂崩れ流失土の直上ないし、その下層である流失土内に石材が混入していた。礎敷1・2間の石材には共通点が多く同質のものと考えられるため、同時期のものと判断される。このため両者は、下層の土砂崩れ（中世前半）の後に構築され、その後2回目（近世）の土砂崩れまでは機能したかどうかは不明であるが、表面に露出した状態であった可能性は高い。また、礎敷2の中には礎石（礎石1・2）と考えられる角礎が2石検出されている。そして、礎敷の表層周辺からは近世の青磁皿1点（4）も出土している。以上のことからすると、この遺構が形成されたのは中世前半の可能性が高いが、遺構面の埋没は近世の平等寺が土砂崩れによって廃絶するまでと考えられる。

### 土坑（図版10・16、写真図版9）

上層遺構面では平坦面の東側にいくつかの土坑が検出された。大半が単なる塗み程度のものであるが、SK 2のみは人為的に掘削されたものである。

#### SK 2 (図版10・16、写真図版9)

平面が瓢箪型に近い形状の土坑で、東西方向に長軸を持つ。長軸1.15m、短軸0.6m前後、深さ0.15～0.2m前後を測る。東側で3層が堆積といったん土坑が埋没した後に1・2層が堆積する土坑が掘削される。土坑西側には埋土に混入する状況で多くの角礫が出土した。

## 2. 下層遺構面

下層遺構面（2・3段階）は1回目（13世紀）の土砂崩れ以前の遺構面である。この遺構面では礎石建物・礎石・礎石抜き取り穴・石列溝・土坑・焼土面などが検出された。内部は北側で標高190.2m、南側で標高189.8mであるが、礎石が並ぶ範囲では標高189.9～190.0m前後に納まっており、建物周辺はほぼ水平に造成されたといえるだろう。この遺構面では礎石建物の段階（2段階）と、後述する前身建物（3段階）の2時期がある。ただし、検出作業は2・3段階を同時にやっている。このため記述は2・3段階をまとめて行うこととする。

この2時期は19層（図版12・断面1）によって分けられ、後述するように2段階の遺構は礎石建物が建てられる段階で平坦面をやや広げ、19層を嵩上げして形成されたものである。

#### 礎石建物・礎石・礎石抜き取り土坑（図版11・14・15、写真図版11～15）

図版14・15に示したとおり東西3間×南北2間分（12m×5m以上）の礎石建物の並びが検出され、このうち7基分に礎石が残されていた。礎石が残る部分の柱間は桁間（東西方向）3.1m、梁間（南北方向）2.1m前後と推定される。ただし、平坦地の広がりからすると建物南側はさらに1～2間分が延びると推定され、最大で南北3間であった可能性がある。一方、東側にもさらに延びていると思われるが、図版6の平坦面の状況からすると、調査区外側にはさらに3間分前後が伸びる可能性があり、最大で東西6間までの建物が復元できる。

さらに、下層では多数の土坑群が検出されたが、これらの土坑群には明確な区別はないものの、いくつかは礎石を据えた抜き取り痕跡のあるものが含まれている。図版14では礎石3・6の南にあるSK20や、礎石7の南にある土坑を並びの復元案として紹介した。これらが同一建物のものとすると礎石6・SK20、礎石7・南側の土坑の間の柱間は3.1～3.2m前後となり、桁行の柱間に近似する。これに対して礎石1・4の南側の延長に存在する土坑では、およそ2.5～2.7m前後となり、礎石建物の梁行の並びに近似した柱間となる。おそらくどちらかが礎石建物の南側の並びの続きと推測されるが、明確にはできなかった。また、礎石2・5の西脇には3つの土坑の並びがあるが、これらは礎石建物とは異なった並びとなる。このように、礎石建物はさらに南側に拡大することが確実であるとともに、異なる建物が建っていた可能性がある。

現況建物と他の礎石建物との切り合い関係は明確ではないが、礎石が残る建物は並びが比較的復元でき、後述のSD4を破壊して敷地造成を行う点や、据付のための礎石を据えた天端レベルが検出面より高い点などからすると、下層遺構面では最も後出の建物であった可能性が高い。このことから礎石建物の段階を前身建物の段階と区別して2段階とした。

礎石鋼々は角礫で上面を水平に据える意識が強い。礎石の大きさには大小が見られるが、最大長0.5～0.75m前後で、概ね一抱え以上の大きさのものである。据えるに当たっては滑車などが必要だった

と思われる。礎石の石材下部は不定形のものが多いため、据付に際して周囲を浅く掘り進め、土坑状とし、人頭大の角彫（楕縫石）を要領よく配置して、礎石天端が水平になるように意識されていた。ただし、個々の礎石の天端を見ると礎石2が最も高く190.76m、礎石1・3が190.70mとこれに続く。さらに、南側の礎石列は礎石4が190.58m、礎石5・6が190.60m、礎石7が190.58mとなり、北側が10cm程高くなり、もともとの地盤レベルが少し高低差をもっていたと考えられる。礎石の石材個々の厚みは北側より南側のほうが、厚みのある石材を用いる傾向がある。このほか、礎石の上端面は自然面ではあるが、やや磨滅が見られた。柱を載せたことによる痕跡であろうか。

今回検出された礎石建物は大型の礎石をもち、据付に根縫石を用いるなど丁寧である点や、桁幅で3.1mという長大な柱間を持つ点など、一般集落の建物とは異なる構造を持つ。これらの特徴からすると本遺構は寺院建築の堂舎（仏堂）などを考えるのが妥当と思われる。ただし、本遺跡では瓦の出土がまったくないため、いずれの建物も（上層遺構面も含めて）瓦葺きではないようである。

一方、礎石建物に先行して建った建物についても柱穴が存在しないことから、同様に礎石構造であったことが推定され、前者の建物と性格は同じであった可能性が高い。ただ、この建物については復元ができなかったことと、何回の建替えがあったのか明確にできなかった。このため、これらを一括して前身建物と呼称して報告を行うこととした。さらに、前身建物の柱間は前述の並びから類推すると礎石建物と大きく隔たらない間隔であったと思われる。このことからすると、前身建物についても礎石建物と構造的には大きな隔たりがないと考えられる。

#### 石列（図版11・14、写真図版14）

礎石建物の北西隅、SD4を切って石列が検出された。礎石1・4の西側脇に位置し、長さ3.3mに渡って検出された。石材は直径15cm前後へ人頭大の角彫を用いている。全体的な傾向としては石材の長軸方向を石垣奥に向けて積んでいる。SD3の北西隅が水流によって抉れたような状態であることから、降雨時にはこの場所に多量の雨水が流れる込むことが重なったとみられ、雨水除けとしてこの部分に石列を設けたと思われる。特に基壇や龜腹を持たない本建物では雨水の集中的な出水に対して礎石が水に洗われる可能性は充分に考えられた。

#### 溝

##### SD3・4（図版11・16、写真図版11～13・16）

下段平坦面の西面及び北面を巡る溝である。基本的に2本が並行して平坦面の外周に巡り、西側では南に流れる。この2本の溝は状況から礎石建物の雨落溝と推定される。

SD3は幅0.3～0.45m、深さ0.15m前後の規模が基本であるが、北西の隅部が広がっている。これは降雨時に崖や屋根からの雨水が流入して形崩れが生じ、幅が広がってしまったものであろう。また、北西隅部背後の崖地形には雨水によって抉られた痕跡が認められ、SD3の膨らみ部に対応する。このことからもSD3の幅の拡大は雨水が影響していることは確実である。

SD4はSD3の内側で検出された溝である。幅0.6～0.8m、深さ0.1～0.2mの規模でSD3と同じく平坦地の外周を巡る。ただし、SD4は北西の隅で石列によって破壊され、北辺は痕跡を留めなくなっている。この2本の雨落溝は、两者とも下層造構面に帰属する遺構であるため中世段階のものであるが、SD3が石列によって破壊されることから礎石建物以前に機能し、SD4は礎石建物の外周を巡ることから礎石建物と同時期であると解釈できる。前述のように、礎石建物はその前段階に同様の建物が建っていた可能性が指摘されている。このことを考慮すると、SD4は前段階の建物の雨落溝、SD3

が後出の礎石建物の雨落溝であると解釈できる。さらに、SD3・4は高低差が0.2m前後存在するが、SD3は礎石の天端に近似し、SD4は低くなる。このことからみると、SD3が前身建物と同時期に機能する可能性は低く、やはり礎石建物と同時期と考えるのが自然である。そのことからすると、前身建物の段階では下段平坦面の敷地がやや狭く、礎石建物の段階で西側に少し拡張されたことが考えられる。

### 土坑

土坑はさまざまなものが検出されたが南側の擾乱や、單なる窪みも含まれ人為的なものとの判別が困難なものも多い。ここでは代表的なものについて紹介しておきたい。また、土坑の中には炭・焼土を混入するものも少なくない。これらは周辺の土砂から埋土に混入したものであるが、礎石建物の建つ以前に何らかの作業に伴って掘削されたものと推定される。ただし、SK1・10・20などいくつかの土坑は礎石抜き取り痕跡の可能性がある。

#### SK1 (図版11・16、写真図版12・13)

礎石抜き取り痕跡の可能性がある土坑である。内部には長さ20~30cm前後の角礫が多数、埋土に混じって投げ込まれたような状況で出土した。埋土は下層にぶい黄褐色の焼土混り層が堆積し、上層には炭混りの土砂が充填されていた。これらの埋土は状況から流入土と考えられる。

#### SK9 (図版11・16、写真図版12・13)

やや歪な楕円形を呈する土坑である。長軸0.8cm、短軸0.63cm、深さ0.14cmを測る。埋土は黒褐色土で、炭や土師器細片が混じる。

#### SK10・11 (図版11・16、写真図版16)

SK10は前後に同規模の土坑が並ぶもので、SK11を切る。礎石抜き取り痕跡の可能性がある土坑である。平面は南北楕円形に近い形状で、長軸0.69m、短軸0.6m、深さ0.18mを測る。SK11は同じく南北に長軸をもち楕円形を呈する。長軸0.6m、短軸0.45m、深さ0.12mを測る。両者とも埋土は黒褐色土で内部に炭が混じっていた。

#### SK12 (図版11・17、写真図版12・13)

東西に長軸を持つ長楕円形の土坑である。長軸0.74m、短軸0.55m、深さ0.14mを測る。底部に炭面が見られ、周囲にはわずかに焼土も観察された。上層は黒褐色土で炭を含む埋土が充填されていた。

#### SK19 (図版11・17、写真図版12・13・16)

概ね円形の土坑で、本地区では比較的大型の土坑である。直径1.0m前後、深さ0.25mを測る。側壁は緩やかに傾斜し、底部は丸く掘削されている。埋土は赤灰色土で焼土の小粒子が多数混入する。

#### SK20 (図版11・17、写真図版12・13)

東西の並びに礎石3、南北の並びに礎石6・礎石3が通るもので、礎石抜き取り痕跡の可能性がある土坑である。平面形は北東から南西方向に長軸を持つ楕円形の土坑で、長軸1.18m、短軸0.9m、深さ0.2mを測る。内部には拳大~直径20cm前後の角礫が埋土に混入されていた。

#### SK21 (図版11・17、写真図版12・13)

平面多角形を呈し、内部に円形の深掘部をもつ2段掘の土坑である。南北に長軸をもち長軸0.8m、短軸0.75m、深さは外側で0.1m、深掘部で0.15mを測る。埋土は暗灰色で炭や焼土が若干混入する。

#### SK22 (図版11・17、写真図版12・13・16)

概ね平面長方形で、長さ0.75m、最大幅0.65m、深さ0.13mを測る土坑である。

#### SK23・24（図版11・17、写真図版12・13・16）

S K23がS K24を切って検出された土坑である。S K23は直径0.8~0.9m、S K24は直径0.7m前後のほぼ円形を呈し、深さは両者とも0.1m前後である。S K23は内部に角礫を多く検出し、S K24はでは長さ0.2mほどの角礫が検出されている。

#### 焼土（図版11、写真図版12・13）

下段平坦面には調査区の中央付近を中心に何箇所かの焼土面が検出された。直径40~50cmの前後のものから長さ1m前後のものまでさまざまであるが、小規模なものほど焼上面の被熱が大きく、面の赤変が著しい。また、この焼土面が検出される周辺は炭の出土も顕著である。ただし、礎石そのものや礎石抜き取り穴には被熱の痕跡や、石材に比熱の痕跡が確認されない。これに対して、焼土面の周辺には何石かに被熱した石材が認められる。このほか、この周辺からは釘が多く出土していることや、小破片ではあるが輪の羽口（75）・焼土（写真図版25）が出土した事実から考えると、礎石建物以前に小鍛冶などの作業工房が存在した可能性がある。

### 第4節 小結

既述のように、伝平等寺跡遺跡では上段地区と下段平坦面の2地区を調査した。このうち、上段地区では掘立柱建物跡・柱穴・土坑などが検出された。ただし、掘立柱建物跡・柱穴は下段平坦面に隣接する範囲に集中して検出されている。これらの遺構の時期は明確ではないが、検出状況からすると中世の可能性が高い。このことを前提とすると建物群は下段平坦面に付属したもののがある。

下段平坦面は上層遺構面が13世紀前半～近世、下層遺構面が12世紀中頃～後半であることが確認された。そして、下段平坦面では12世紀中頃に平坦面が形成されるが、13世紀初頭と近世の2度にわたって土砂崩れが発生している。この土砂崩れによって、13世紀前半（礎石建物段階）と近世（平等寺段階）に堂舎（寺院）の破壊ないし損壊を蒙っており、少なくとも近世段階には移転を余儀なくされたことは前述のとおりである。また、12世紀中頃に堂舎を創建した後、13世紀初頭に土砂崩れが発生するまでに1回以上の建て替えが行われ、前身建物・S D 4→礎石建物・S D 3という変遷も確認された。このため本地点では最上層を含め4段階の変遷が明らかになった。

ただし、下層の前身建物は複数回の建て替えが行われた可能性があるが、検出遺構が明確でないため、ここでは前身建物として一括で報告した。また、近世の平等寺についても建物そのものが検出できなかったことや、13世紀初頭の土砂崩れ後については、礎石・礎敷の検出から何らかの建物の存在が存在することは明らかになったが、13世紀以降の状況は不明とせざるをえない。

ただし、考古学的に痕跡がたどれないものの、上層遺構面そのものが中世前半から江戸時代までの間、全く信仰の場所として利用されなかつたのかどうかについては、疑問も残される。近世に至って平等寺が、再度この場所に存在した事実からすると、堂舎そのものの有無は別にして何らかの形で信仰の場所として維持されたと考えるほうが自然であろう。このことから、中世前半に創建された下段平坦面の場所の信仰性（建物の有無は別にして）は失われることなく継続したと考えておきたい。

## 第4章 出土遺物

### 第1節 遺物概要

伝平等寺跡遺跡より出土した遺物はコンテナ20箱である。主として下段平坦面から出土したもので、寺院堂舎に関連する遺物が多くを占める。

出土遺物には弥生時代の甕、奈良時代須恵器蓋、13世紀前半前後の土師器小皿・皿・杯・甕・瓶、須恵器皿・椀・鉢・瓦器椀、黒色土器椀、土製品輪羽口、近世の陶器・染付磁器や、鉄製品では釘・鈸状製品・鐵鐵・錢貨などがある。

#### 土器分類

出土土器のうち中世前半の土師器皿・杯の類は多様な形態のものが含まれる。このため土師器については特に以下のように細分類を行い、以下の記述を統一した。また、上師器杯・皿の類には胎土の発色が濃赤色になるものが見られた。これらについては赤色系として観察表で注記した。

#### 土師器

皿 一手づくね皿（33・59）とヘラ切り（66・76）のものがある。

小皿 - 小皿は回転台使用の糸切り皿と底部回転ヘラ切り（77）のものの2種が存在する。ほとんどが糸切り底のものである。これらについては以下のように細分される。

A 1 内溝する体部をもつもの。

A 2 外反する体部をもつもの。

A 3 全体が薄手で、内溝する体部をもつもの。

A 4 全体が薄手で、外反する体部をもつもの。

A 5 器高が高く、ハの字形に直線的に開くタイプ。

A 6 厚手のもの。

杯 - 杯は高台をもつもの（杯B）は存在せず、杯Aのみで構成される。杯Aは体部が斜め開き気味のものと、直立気味に立ち上がるものがある。

A 1 底径がやや大きく、体部が内溝ないし直立気味に立ち上がるもの。

A 2 底径がやや小さく、体部が開き気味に立ち上がるもの。

椀 - 椓には高台をもたないAタイプ（51・73）と、高台をもつBタイプが存在する。このうち、高台内部が中実のB1タイプと中空のB2タイプがある。

A 高台を持たないもの。

B 1 高台内部が窪まず、内実のもの。

B 2 高台内部が窪むもの。

## 第2節 上段地区の遺物（図版18、写真図版25）

上段平坦面から出土した土器は総数でもコンテナ1箱に満たないもので、極めて少量である。図化できたものは7点である。器種に弥生時代の甕・奈良時代の須恵器杯蓋、中世の土師器皿・杯、近世の磁器皿・碗、陶器皿がある。すべてが表土などの堆積層からの出土で、遺構から出土したものはわずかな土師器の縦片のみにかぎられる。一方、出土遺物のうち胎土が赤茶色に発色する特徴的な一群がある。これらについては赤色系土器と呼称した。この種の土師器は器表に細かな貫入状のひび割れが生じているものが多い。

近世の遺物は3点を図化した。1は関西系の施釉陶器皿である。密な胎土の製品で、内外面に透明釉を施す。2は肥前系染付磁器の皿である。底部内面を蛇の目に釉剥ぎし、内面に草花文を描く個体である。3は肥前系磁器半筒碗である。外面部に草花文を描く。

5・6の2個体は中世前半の遺物である。5は土師器小皿A2である。器表の摩滅が著しい個体である。6は椀B1で底部が窪まないものである。

7は弥生土器の甕である。底部の小片で時期の詳細は不明であるが後期頃のものと推定される。8は奈良時代の須恵器蓋の口縁部片である。かえりがつくもので、天井がやや丸く膨らみを持つ。

## 第3節 下段平坦面の遺物

下段平坦面から出土した遺物は比較的豊富で、コンテナ10箱分の土器が出土している。この地区的遺物は大きく上層遺構面と下層遺構面に分けられる。記述は面ごとに行ったが、鉄製品についてはまとめて記述した。また、確認調査の遺物はすべて下段平坦面（トレンチ1）から出土したものである。ただし、この遺物は、出土層位が確かめられないためまとめて報告した。

### 1. 確認調査（図版18、写真図版19・20・22～24）

14点を図化した。土師器小皿・杯がある。

土師器小皿（9～12）は4点を図化した。9は底部ヘラ切り手法で、他はすべて糸切り手法である。このうち9・10・12は赤色系土器である。

土師器杯（17・18）は2点を図化した。18は糸切り手法であるが、17は摩滅のため不明である。両者とも高台がなく、底部から体部が直接立ち上がる。底部片のため詳細は不明であるが、どちらも胎土が赤色ないし赤褐色の個体で、2個体とも赤色系土器である。

椀（13～16・19）は5点を図化した。13～16は高台をもつもので、14が椀A、13・15が椀B1、16・19が椀B2になる。14は高台部に絞り目状の皺が見られるが、これは成形時に粘土を捻った痕跡と思われる。19は大振りな個体で高台が搬形になり体部が外開きになる。

黒色土器椀（20）は1点が出土した。底部を欠く個体で、内外面の磨滅が著しい。体部上半でやや屈曲する体部を有し、内面には器面調整のためのヘラミガキが観察される。

須恵器椀（21・22）は2点が出土した。底部は糸切り手法で、直線的に開く体部をもつ。

## 2. 上層遺構面の遺物

上層から出土した遺物は集石1・2から出土したもののが中心で、近世の青磁皿1点も含まれている。図化したのは18点である。

### 南側の斜面（図版18、写真図版24）

23~25の3点は下段の南端部から一部斜面にかけて出土した遺物である。

土師器小皿（23・24）は2個体がある。23は小皿A1、24は小皿A5である。24はやや器高の高い個体で体部が「い」の字に開く。

須恵器椀（25）は口縁部片である。器面を平滑に仕上げ、体部はやや湾曲しながら立ち上げる。

### 集石（図版18・19、写真図版19~22・23・25）

26~30は集石1からの出土、4・31~42は集石2からの出土、43~46は集石4からそれぞれ出土したものである。ただし、これらの集石は同一の遺構と考えられるので、ここでは器種ごとに一括して報告する。出土遺物には土師器小皿・杯、黒色土器椀、瓦器椀・縁の羽口がある。

近世の遺物は1点のみの出土である。近世磁器（4）は青磁皿で、集石2の上層から検出された。肥前系の製品で、底部内面を蛇の目に剥ぎする。

土師器小皿（26~28・31~32・43）は6点を図化した。33を除いて回転台使用で底部糸切り手法によって仕上げる個体である。31が小皿A2、27・32が小皿A3、26・28が小皿A4である。このうち27・28の2個体は赤色系土器である。43は小皿A1で、回転台使用で体部が開く。

土師器皿（33）は1個体がある。手づくね成形のもので、口縁部下端が著しく肥厚し、内外面に指痕跡が残される。

土師器杯（29・30・34・44~46）は3点が出土した。29・30・34が杯B1となる。底体部の境が明瞭でややカーブしながら斜めに開く体部を持つ。44~46の3点はいずれもAタイプで、高台をもたないものである。ただし、底部のみの破片であるため器形の詳細は不明である。また、これらは底径が小さく体部の立ち上がりがやや斜めに開く可能性があるため椀である可能性も残される。なお、この3個体はいずれも赤色系土器である。

土師器椀（35・36・38）は3点を図化した。すべて高台内部が中実の椀B1になる。

黒色土器椀（37・39・40）は3点を図化した。37は底部の細片で、黒色土器B類である。ベタ高台を持ち、内面をわずかにミガキ調整するが、全体に磨滅が著しい。39・40はベタ高台で、底部に糸切り痕跡を観察する。39は内黒タイプで、内面に密な不定方向のミガキが観察される。40は内外面に炭素が吸着する黒色土器B類で、内面に細かなミガキが観察される。

瓦器椀（41）は1点が出土した。体部が丸く立ち上がり、口縁端部を尖らせ気味におえる個体である。

縁の羽口（42）は小破片で1点が出土した。残存部からの復元では直径10cm未満の小型の羽口と推定される。羽口の端部の破片と思われ、硬質で端部は被熱のため青変する。外側面に縱方向のケズリ痕跡を観察する。

### 背後の斜面（図版19、写真図版19~24）

下段平坦面背後の斜面で、上段地区との境をなす地点周辺からの出土遺物である。土砂崩れの崩落土周辺から出土したものである。本来下層遺構面で採取すべきものを多く含むが、層位的な分離ができない。また、上段地区からの流失遺物も含まれると思われる。出土遺物には土師器小皿・杯・椀・瓶子、黒色土器椀、須恵器鉢がある。

土師器小皿（47）は1点を図化した。回転台使用で小皿A1タイプのものである。器高が低く、器壁の厚い個体である。

土師器杯（48～50・52）は4点を図化した。48と50が杯A 2の体部を廻るタイプのものである。49・52もおそらくA 2タイプと思われるが体部上半を欠くため詳細は不明である。

土師器椀（51・53・54）は3点を図化した。51は高台のない椀Aタイプである。薄手の個体で体部下半の水挽き痕跡が顕著に残る。53は椀B 2のタイプで内面底部を窪ませる。ただし、底部中心部のみを大きく窪ませるもので、16・19・64などのように器壁の厚みを一定にし、外面と対応させるほどではない。54は椀B 2のタイプで高台の厚みに比べて体部が薄く、斜め上方に立ち上げる。

瓶子（55）は1点が出土した。口縁部を欠く個体で、残存高8.1cm、底径7.1cmを測る小型の製品である。底部が大きく瓶子としてはアンバランスなプロポーションをもつ。底部には回転系切りの痕跡が残され、体部には水挽き痕跡が顕著に残される。

黒色土器椀（56・57）は2点を図化した。いずれもベタ高台をもつ丹波独特の個体で、黒色土器B類である。底部には系切り痕跡が観察され、内面に密なミガキが施される。さらに、57では竈先で内面に「十」字の記号を描く。

須恵器鉢（58）は、口縁部の小片で、小さな注ぎ口を持つ。口縁部は外方に折り、罐部を横ナデによって丸く仕上げている。小片のため全体の器形を知ることはできないが、丸く済曲しボール状の形態をもつ製品と推定される。

### 3. 下層遺構面の遺物

下層遺構面からは礎石建物の周辺を中心にして多くの遺物が出土した。ここでは上層・下層両方の遺物を一括で報告する。出土遺物には土師器皿・小皿・杯・瓶子・甕・黒色土器椀・瓦器椀・須恵器鉢・鰐羽口がある。図化したものは52個体である。

出土遺物は遺構・包含層・集石・斜面の4地区に大きく分かれるが、記述はこの順でおこなう。

土器群（図版20、写真図版16・19・21）

59～63までの5個体は下層検出面に密着した土器（写真図版16②）で、完形に近いものが多い。おそらく地山上に放置された土器群と推定される。一括性が高い土器群と推定されるのでまとめて報告する。土師器皿（59）は1点が出土した。土師器皿で手づくねの製品である。口径14.2cm、器高3.2cmと今回出土した土師器皿の中で、最も大型のものであった。内面及び外面体部上半を横ナデ調整するもので、体部下半には顕著に指痕痕跡を残す。

土師器杯（60～63）は4点を図化した。すべて杯A 1と思われるが、63は体部を欠くため詳細不明である。61のみ底部ヘラ切りであるが、他は系切り手法のものである。口径13cm台のもので、やや丸く内湾気味に体部が立ち上がる特徴がある。

土坑

土坑群は大半が地山から検出され、下層に属するものが多数検出された。

SK 1（図版20、写真図版22）

土師器椀（65）は1点が出土した。高台内面が中空になる椀B 2になるタイプの個体である。大振りの個体で腰部の屈曲が著しい。

SK 2（図版20、写真図版 22）

土師器椀（64）は1点が出土した。体部下半以下の個体で高い高台をもつ。内面底部は窪んでおり、全体的に器壁が3mm程度と薄い。

**SK10**（図版20、写真図版20）

土師器小皿（68）は1点が出土した。回転糸切り手法で、厚手の個体である。口縁部を少し外反させ、体部は小さく短く立ち上げる。

**SK15**（図版20、写真図版20・21）

土師器皿（66）、土師器杯（67）の2点がある。66は口径11cm、器高1.8cmで、回転ヘラ切り手法である。短い体部を湾曲しながら立ち上げ、口縁端部を外反させる。67は口径12.9cm、器高4.45cmの個体で口径の割りに器高の高い個体である。底部はやや丸く、体部は上方に直線的に立ち上がる。体部は中央がやや窪む特徴を持つ。なお、67は赤色系土器である。

**SK19**（図版20、写真図版19）

土師器杯（69）は1点が出土した。口径14.90cm、器高3.80cmの個体で、67と同じく口径の割に器高の高い個体である。底部はやや丸く、体部は上方に直線的に立ち上がる。体部は中央がやや窪む特徴を持つ。底体部の境は全周しないケズリ調整を施す。

**SD 1**（図版20、写真図版23）

黒色土器椀（70）は1点が出土した。内面に密なミガキ調整を施す、低く小さい平高台が観察され、底部には糸切り痕跡が観察される。底部片のため器形全体の詳細は不明である。

**SD 2**（図版20、写真図版19）

土師器杯（71）は1点が出土した。杯A 2になるもので、体部が斜めに開きながら直線的に立ち上がる。底体部の境が明瞭な個体である。

**SD 3**（図版20、写真図版21）

土師器碗（72・73）は2点が出土した。72は碗B 1、53は碗Aになるタイプである。72は底部の小片で器表が荒れ、細かな調整は不明である。73は体部の水挽き痕跡が顕著に残る個体である。なお、72は赤色系土器である。

**礎石1・3の下**（図版20 写真図版21）

礎石1の据付痕跡内からは土師器杯（74）・碗（75）の2点が出土した。74は土師器杯Aで、体部を直線的に開くもので、75は土師器碗B 1である。

礎石3の下からは土師器皿（76）1点が出土した。体部を1段ナデする個体と思われるが、磨滅のため調整の詳細は不明である。底部をはじめ個体のゆがみが著しい。

**包含層**（図版20 写真図版20～25）

包含層の遺物は後述する造構面上に敷き詰められた状態で、細片が多いため図化できたものは少ない。人半が上層に属する遺物である。さらに、上層は礎石とSD 3以外には造構が検出されていないため、遺物を厳密に抽出できない。

土師器小皿（77・78）は2点を図化した。77が小皿A 2、78が小皿A 1タイプで、赤色系土器である。土師器杯（79～83・85・86）は7点を図化した。82・83・85は杯2タイプ、86は杯1タイプである。底部が丸く湾曲し、体部もやや内湾しながら立ち上がる個体である。他の3点に比べやや器壁が薄く、丁寧なつくりである。そのほかの79～81は体部を欠損するため詳細は不明である。このうち80・81は赤色系土器である。

土師器碗（84・87）は2点を図化した。84は碗B1タイプ、87は碗B2タイプになる。87は器壁が薄く、つくりが丁寧であるが、84は高台周辺を雑に仕上げる印象である。なお、このうち84は赤色系上器である。

土師器甕（88・89）は2点が出土した。両者とも口縁部周辺の小片のため、全体の器形を知ることはできない。口縁部をくの字に折り、端部の斜め上方に面を持つ意識のある個体である。89の体部外面には右上がりの平行タクキが観察される。

黒色土器碗（90・91）は2点が出土した。口縁部上半を横ナデ調整し、内面には密なミガキ痕跡が観察される。91は高台がなく、底部を回転糸切りによって切り離す。内面には僅かではあるがやや粗いミガキが観察される。

#### 4. 金属製品（図版21 写真図版26）

金属製品には和釘（M1～14）・鑿状製品（M15）・鉄鎌（M16）・錢貨（M17）がある。M1～16は下段平坦面上層の集石周辺からの出土品であるが、M17のみは下段平坦面斜面の遺物である。

和釘はすべてが下段平坦面周辺からの出土で、すべて角釘である。M1・2・12・13は頭巻タイプであるが、M3・4・10・11・14は釘頭を折り曲げ大きく平な面を打ち広げるものである。このうちM3・4は頭を折り曲げて大きく打ち広げたもので特徴的である。

完存するものはM14の1点のみで長さ19.65cm、幅は頭直下で1.0cm、先端付近で2.5mmで、6寸の釘である。M12・13もこれと同等の長さものと思われるが先端を欠くため、詳細は不明である。また、M7・8は釘の中ほどのみが残るが、これらも幅が1.05～1.2mmと太く、M14に近い長さの釘の可能性がある。なお、M4・9・14には木質の纖維が付着しており、打ち込まれた木材の一部が鋲によって接着したものであろう。

一方、M7・8・12・13・14などは4～5寸前後の釘の可能性があり、6寸のものを含め一般集落ではあまり見かけない出土品である。このため、これらは堂舎の建築部材に使用された釘の可能性がある。栄根寺遺跡・満願寺遺跡（川西市）などの寺院遺跡の調査においても、同様の4～5寸前後の釘が出土しており、この時期の堂舎建築には建築部材や仏壇周辺に釘が使用されたことが確認される。

鑿状製品（M15）はやや肉厚で先端に向ってカーブする。このカーブは使用時に曲げられたもので、旧状はまっすぐであった可能性が高い。法量は長さ8.8cmで、基部の厚みが1.2cm、先端が4mmと細くなる。

鉄鎌（M16）は茎周辺のみの個体である。全形が残らないため詳細は不明である。

錢貨（M17）は寛永通宝である。直径 2.4cm、厚さ 2 mmを測る。

### 第5節 小結

今回出土した土器群は土師器皿・碗・杯が大多数を占めている。細かく碎かれた破片が多いいため図化した個体は限られた。これに対して須恵器碗や黒色土器碗、瓦器碗なども出土したが個体数では極少数である。また、器種ごとでは須恵器皿・鉢、瓦器皿を欠き、貿易陶磁器にいたっては全く出土しておらず、一般的な集落に比べ組成は単純といわざるをえない。

## 1. 個別の器種について

ここでは土師器・須恵器・黒色土器・瓦器などの遺物の器種ごとに若干の検討を行ってみたい。

まず、土師器では小皿・杯・碗が中心で、皿（59は手づくね、66・76はヘラ切り手法）は少數であった。小皿・杯・碗は多数の出土を見たが、大半が底部糸切り手法のもので、輪轂によって製作されたもので占められていた。その他、古代末に特徴的なトボは本遺跡には含まれない。

一方、出土した土師器の中に、胎土に赤い発色を持つ一群がみられた。これらには小皿（9・10・12・27・28・78）、杯（17・18・44・45・46・67・80・81）、碗（72・84）がある。特徴的な発色をもつもので、中には45・81・84のように白色系の粘土を混ぜるものがあり、破片（未実測含む）も含めると十数個程度このような胎土のものが含まれていた。これらは器表に貫入状のひび割れが入るのが特徴で、胎土はやや粘性を欠く印象を持つ。

土師器の個別の器種では以下のことが指摘できる。

碗は高台を持たない碗Aタイプ、ベタ高台をもつ碗Bタイプがある。この碗Bタイプのうち、高台内部が内実のB1タイプ（6・13～15・35・36・38・51・54・65・72・75）と、高台内部が中空のB2（16・19・53・64・87）がある。ただし、輪高台のものは含まれない。また、高台内部が窪み中空になる碗B2タイプは個体数が少ないが、完全に器壁に沿って窪むものはさらに少なく19・64・87の3個体のみである。

器形も全体的に部体が開き気味で、器高の低い皿に近い形態のもつものが含まれる。これら的一群は皿や杯との差が必ずしも明確ではないものも見られ、碗形態が退化している印象を持つ。

杯は底体部の塊が屈曲し明瞭なものが多い。切り離し技法は回転糸切りのものと、ヘラ切りによるものの2種類があるが、前者が圧倒的に多い。高台を持つものではなく、全体に調整は省略傾向のものが多く、体部上半のナデも軽く施す。さらに、口縁端部は丸くやや肥厚気味になる傾向がある。底径が8～10cm前後で体部を直立気味に立ち上げるものと、底径が小さく体部を開き気味に立ち上げるものがある。

煮炊具は壺のみが出土しており、壺・羽釜の類は出土していない。

黒色土器は碗のみがある。39・40・56・57・70・90・91の7個体を実測した。高台をもつ在地産のもので占められる。全体の器形を知ることができるものはないが、おおむね口縁端部を丸くおえ、技法的には省略が進み退化したものである。

これらの資料は初田館跡<sup>(1)</sup>（篠山市丹南町初田）の碗B bに相当するとと思われるが、この年代観に従えば12世紀中頃前後の1群と推定される。

瓦器も碗のみがある。41の1点のみを図化したが、総個体数でも2ないし3点程度が出土したのみである。すべて上層のみの出土である。磨滅のため詳細は不明だが、口縁部の省略が進み、内外面のミガキもあまり密ではない。12世紀末ないし13世紀前半のものであろう。

須恵器も碗のみが出土したが、すべて上層のみの出土である。高台は退化し、体部も開き気味である。神出窯跡の時期編年<sup>(2)</sup>では神出II期～2段階に当たる。

## 2. 時期について

遺物の種別ごとの概要は以上のとおりであるが、次に時期について検討したい。初田館跡（篠山市丹南町初田）旧河道の出土土器は10世紀前後から13世紀前後までの変遷が迫れ、まとまった土器群として

知られる。この資料では回転糸切り手法の土師器小皿が出現するのは12世紀に入ってからとされ、瓦器が出現するのは12世紀中頃とされる。さらに、黒色土器が残るのは12世紀中頃までとされる。そして、当遺跡の土師器杯は口径が小型化し体部が斜めに開き氣味になるが、この形態は初田館山河道資料の坪A bに近似する。また、下層の67・69は形態からやや古層のものと推定される。

一方、三田市の対中遺跡<sup>(1)</sup>は地域における有力層の屢數と推測される屋敷地である。ここからは11～12世紀頃の遺物群が出土している。当遺跡の土師器杯は杯Eタイプのものに近似し、時期的には同遺跡のもっとも後出のII-C期（12世紀末）の時期に対応する可能性が高い。

八上上遺跡<sup>(2)</sup>（篠山市八上上）は多紀郡の集落遺跡であるが、播丹型の堀や瓦器が出土している。また、黒色土器は含まれず、時期的には確実に13世紀に以降のものと評価されている。組成を比較すると時期的瓦器が多く含まれる一方黒色土器がなく、伝平等寺跡遺跡より後出のものと判断される。

以上のことからすると、当遺跡の遺物群は12世紀中頃から13世紀初頭にかけてのものが含まれるが、下段平坦面下層（2・3段階）のものは既に12世紀中頃へ後半前に収まると考えられ、同じく上層（1段階の開始期）は近世の搅乱によって若干の混入が見られるが、13世紀初めのものとしてよいだろう。

#### 註

- （1）山田清朗ほか『初田館跡』兵庫県教育委員会1992  
（2）森田 移「東播磨系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯跡群を中心に－」

『神戸市立博物館研究紀要』第3号1986

- （3）深井明比古『対中』兵庫県教育委員会1988  
（4）山田清朗ほか『八上上遺跡』兵庫県教育委員会2003

表1 伝平等寺跡遺跡遺物観察表1

上器類								備考	色調
No.	種別	器種	出土地区	口径	器高	底径	残存		
1	施鉢陶器	瓶	上段平坦面	—	(1.90)	(4.00)	底部片	高台高脚。南な船に通明の施鉢を施す。高有 周辺は器底で、舟に出し成る。所な船。	透明藍 緑+土。2.5YR/3
2	馬糞形器	瓶	上段平坦面	(11.00)	(2.80)	3.45	口縁1/10 底部片	馬糞形骨灰瓶。19世紀。底部内側を蛇の目に輪 刺す。内側に草花文を施す。高台長行をケメリ 刺す。	白色。
3	染付罐器	碗	下段平坦面	—	(5.20)	(4.00)	底部片	施赤文磁器。半同窓。外周全体に草花文、高台内 に3重山面。	白色の施赤に透明釉
4	青磁	瓶	下段平坦面	—	(1.75)	(4.20)	底部1/2 底部片	前系標題。有施鉢を施す。高台内側は露胎。底 内側は蛇の目状に施して施す。黒い輪高台を 持つ。	透明藍 緑+土。5YR/1
5	土師器	小瓶	上段平坦面	(8.40)	(1.25)	5.20	口縁1/4 底部片	小瓶A 2・織目系。施鉢が著しく詳細は不明。体 部を外反気味に立ち上げる。	内D 5YR/6 外D 5YR/4
6	土器器	碗	上段平坦面	—	(3.25)	6.40	底部片	器名1・青色系。底部回転系切り。厚手のつくり で内底面を少し削りせる。	内D 5YR/1~ 7.5YR/0 外D 5YR/3
7	漆生土器	甕	上段平坦面	—	(4.90)	2.95	底部片	漆滅が著しく網目などの詳細は不明。底部が黑色 を呈する。	内D 5YR/4 外D 5YR/6
8	漆器	瓶	上段平坦面	(18.00)	(2.10)	—	口縁1/8 底部片	奈良時代。シャープなつくりで、細長いアーチによる 印松の動きが斬新な優美。	内D 2.5YR/2 外D 2.5YR/3
9	土瓶	小瓶	下段平坦面	(7.60)	(1.30)	5.60	2/3 底部片	小瓶A 1・白色系。底部回転系切り。体部は斜 め上方に立ち上げ腰部をやや落とせ気味に丸くお かる。	内D 7.5YR/4
10	土師器	小瓶	下段平坦面	(8.20)	(1.30)	5.65	口縁1/4 底部片	小瓶A 2・織目系。底部回転系切り。体部は丸く 斜めに立ち上がり、腰部を外反気味に丸くおえる。	内D 10YR/7/4
11	土器器	小瓶	下段平坦面	8.05	1.35	6.60	突起部 底部片	小瓶A 2・白色系。底部回転系切り。体部は斜め 上方に立ち上がり腰部を丸くおえる。	内D 10YR/7/4~ 5YR/1
12	土師器	小瓶	下段平坦面	(8.80)	(1.90)	(5.20)	口縁1/8 底部片	小瓶A 1・白色系。底部回転系切り。体部を斜め 上方に立ち上げる。体部に斜めな水脱き痕が認 される。	内D 7.5YR/6
13	土器器	碗	下段平坦面	—	(2.05)	6.60	底部片	碗A 1・青色系。底部回転系切り。高い高台を持 つ。内側には底もたない。厚手の作り。	内D 7.5YR/4
14	土師器	碗	下段平坦面	—	(1.70)	6.05	底部片	碗A 1・織目系。底部回転系切り。高台に斜め状 の斜状痕が施されている。	内D 10YR/7/4
15	土師器	碗	下段平坦面	—	(2.30)	6.45	底部片	碗A 1・白色系。底部回転系切り。高い高台を持 つ。厚手の作りで、内側に段段もたない。	内D 7.5YR/4
16	土器器	碗	下段平坦面	—	(3.75)	7.10	底部片	碗B 2・高さんだ色図。底部回転系切り。高い高 台を持つ。内側込みみをやや落とす。厚手の作り。	内D 10YR/6/4
17	土師器	杯	下段平坦面	—	(2.10)	(7.00)	—	杯A 2・織目系。底部回転系切り。底部の切り口 は斜めで、底部は丸くおえる。	内D 5YR/7/6
18	土器器	杯	下段平坦面	—	(1.80)	5.70	—	杯A 2・白色系。底部回転系切り。体部は斜めに 立ち上げる。	内D 2.5YR/8
19	土師器	碗	下段平坦面	—	(3.95)	(7.25)	—	碗B 2・青色系。底部回転系切り。厚手のつくり で、体部を斜め上方に立ち上げる。内側底面が大き く伸びる。	内D 7.5YR/6/6
20	黑色土器	碗	下段平坦面	(13.30)	(4.65)	—	—	黑色土器B種。外内面を斜めアーチ調整、内面に藤面 白縁1/2の施設のミガクが船形に施設される。地鐵類 底部片	内D 3/2~5YR/3 外D 5YR/4
21	漆器	碗	下段平坦面	(15.40)	(5.20)	(6.00)	口縁1/8 底部片	漆器回転系切り。体部は斜めに斜め上方に立 ち上げる。内側込みみをやや落とす。	内D 5YR/1~N4/
22	漆器	碗	下段平坦面	(16.20)	(4.95)	6.90	口縁1/8 底部片	漆器回転系切り。体部は斜めに斜め上方に立 ち上げる。内側込みみをやや落とす。	内D 5YR/1
23	土師器	小瓶	下段平坦面	(8.85)	(1.60)	(4.60)	1/3 底部片	小瓶A 2・織目系。底部回転系切り。体部は斜め 上方に立ち上げる。腰部を丸めさせておれる。	内D 5YR/6
24	土器器	小瓶	下段平坦面	16.15	2.20	5.60	口縁1/2 底部片	小瓶A 5・織目系。底部回転系切り。体部はハ 内側に開き、腰部を外反し丸くおれる。	内D 2.5YR/6~ 10YR/4
25	漆器	碗	下段平坦面	(15.90)	(3.60)	—	—	漆器A 1・高負担。腰部を斜め上方に立 ち上げる。内側込みみをやや落とす。	内D 5YR/1 外D 5YR/1~8/6
26	土器器	小瓶	下段平坦面	7.75	0.85	6.10	口縁3/4 底部片	小瓶A 4・白色系。底部回転系切り。腰部は斜め上方 に開き、腰部を斜め上方に立てる。体部はやや 丸められるが腰部を斜め上方に立てる。	内D 5YR/6
27	土器器	小瓶	下段平坦面	(7.70)	(1.40)	5.20	口縁1/8 底部片	小瓶A 3・白色系。底部回転系切り。体部は丸く 立ち上げ、腰部を上方に向けておる。	内D 5YR/5/6
28	土器器	小瓶	下段平坦面	(7.90)	(1.20)	(5.10)	—	小瓶A 4・白色系。底部回転系切り。体部は丸く 立ち上げ、腰部を斜め上方に立てる。	内D 2.5YR/8
29	土器器	杯	下段平坦面	—	(3.25)	6.80	底部片	小瓶A 4・白色系。底部回転系切り。体部は斜め上方 に立ち上げ、腰部を丸くおれる。	内D 10YR/4
30	土器器	杯	下段平坦面	(15.30)	(4.10)	7.20	口縁1/8 底部片	小瓶A 2・白色系。底部回転系切り。斜め上方に立 ち上げ、腰部を丸くおれる。	内D 10YR/3
31	土器器	小瓶	下段平坦面	8.20	1.25	5.90	—	小瓶A 3・白色系。底部回転系切り。体部は丸く 立ち上げ、腰部を上方に向けて丸め気味におる。	内D 5YR/8
32	土器器	小瓶	下段平坦面	8.30	1.20	5.65	口縁3/4 底部片	小瓶A 3・白色系。底部回転系切り。体部は丸く 立ち上げ、腰部を上方に向けて丸め気味におる。	内D 10YR/3

表2 伝平等寺跡遺物観察表2

土器類2									
No.	復元	器種	出土地区	口径	基高	底径	残存	備考	色 調
33	土師器	甌	下段平坦面	(11.80)	(2.25)	—	口縁1/8 底部片	手づくね。口縁部および下部が肥厚する。体部は側面に開く。外面部は下半は指おきで断続的。	内) 7.5TB6/6
34	土師器	杯	下段平坦面	—	(1.86)	(6.90)	底部片	杯A 1・底部回転系切り、底部片。	内) 7.5TB7/6~6/6
35	土師器	甌	下段平坦面	—	(2.30)	(7.30)	底部片	瓶A 1・底部回転系切り、高い臺面を持つ。内面に段はない。	内) 7.5TB6/6
36	土師器	甌	下段平坦面	—	(2.00)	(6.70)	底部片	瓶B 1・底部回転系切り、高い臺面を持つ。内面に段はない。底成時の付着痕跡がある。	内) 7.5TB6/4
37	黒色土器	甌	下段平坦面	(1.85)	(7.10)	底部片	黒色上部有頸。高台を持ち、内面にわずかにミガキ調査。全体に擦耗が著しい。	内) K3/	
38	土師器	甌	下段平坦面	—	(2.90)	7.60	底部片	瓶B 1・底部回転系切り、高い臺面を持つ。内面に段はない。	内) 7.5TB7/4
39	黒色土器	甌	下段平坦面	—	(2.50)	5.75	底部片	黒色十字切目。白帯を持つ。内面ミガキによって特徴的。外面部は擦耗が著しい。触上に0.5mmの砂粒を含む。	内) N3/ 外) 10YR7/3
40	黒色土器	甌	下段平坦面	—	(3.60)	(7.50)	底部片	黒色上部有頸。高台を持ち、内面にミガキ調査。全体に擦耗が著しい。	内) K3/
41	瓦器	甌	下段平坦面	(14.80)	(4.15)	—	口縁1/8 底部片	内) 黒色十字切目。白帯を持つ。内面ミガキによって特徴的。外面部は擦耗が著しい。触上に0.5mmの砂粒を含む。 外) 11/4~7.5TB7/1	内) N3/ 外) 10YR7/3~6/2
42	土製品	輪の凹口	下段平坦面	長さ (5.7)	幅 (5.0)	厚さ (2.05)	断片	瓶A のみで詳細は不明であるが、他の小さい凹口と思われる。	内) 2.5TB7/6 外) K3/
43	土師器	小甌	下段平坦面	(8.10)	(1.30)	5.85	1/4	小豆A 1・白色系、底部回転系切り。体部は斜め1方に立ち上げ。底部を外反する。	内) 7.5TB8/4 外) 10YR7/3~6/2
44	土師器	杯	下段平坦面	—	(1.94)	6.30	口縁1/8 底部片	瓶A 1・赤色系、底部回転系切り。体部は斜め1方に立ち上げ。底部を外反する。	内) 7.5TB8/1~5TB6/6
45	土師器	杯	下段平坦面	—	(2.10)	6.10	底部片	瓶A 1・赤色系、底部回転系切り。体部は斜め上方に立ち、外面部に水浸き痕跡が顕著。白色土が混入。感想する。	内) 5TB6/8
46	土師器	杯	下段平坦面	—	(2.20)	5.50	底部片	瓶A 1・赤色系、底部回転系切り。体部は斜め上方に立ち、外面部に水浸き痕跡が顕著。	内) 2.5TB5/8
47	土師器	小甌	下段平坦面	9.90	1.05	7.40	完形 底部片	小豆A 1・白色系、擦耗が著しく詳細は不明。底部回転系切り。体部は丸く立ち上げる。底部が大きくなる。	内) 10YR8/4
48	土師器	杯	下段平坦面	(13.50)	(3.60)	—	1/3 底部片	瓶A 2・複色系、底部回転系切り。内面は外反的で立ち上がる。	内) 10YR7/4
49	土師器	杯	下段平坦面	—	(2.95)	(4.70)	底部片	瓶A 1・複色系、擦耗が著しく詳細は不明。体部は直線的に立ち上がる。	内) 5TB6/8
50	土師器	杯	下段平坦面	(11.20)	(3.85)	—	1/4 底部片	瓶A 1・複色系、底部回転系切り。体部は斜め1方に立ち、外面部に水浸き痕跡が著しい。	内) 5TB5/6
51	土師器	甌	下段平坦面	(14.00)	(4.20)	(6.20)	1/2 底部片	瓶A 1・白色系、底部回転系切り。体部は外反的で直線的に立ち上がる。外面部の水浸き痕跡が著しい。	内) 7.5TB8/6~5TB7/6
52	土師器	杯	下段斜面	—	(3.15)	7.45	底部片	瓶A 1・複色系、底部回転系切り。体部中位で曲面する。	内) 7.5TB7/6
53	土師器	甌	下段平坦面	—	(2.80)	7.20	底部片	瓶B 2・複色系。底部は回転系切り。ベタ高台で内面見込みを大きくします。	内) 5TB6/6 外) 7.5TB6/6
54	土師器	甌	下段平坦面	—	(5.35)	(6.30)	底部片	瓶B 1・複色系。擦耗が早くく詳細は不明。体部は直線的に立ち、外面部に水浸き痕跡が顕著。	内) 5TB6/8
55	土師器	瓶子	下段平坦面	—	(8.10)	7.10	口縁欠 底部片	土器1・体部に細かな水浸き痕跡が残る。底部は角切り手形。底部が厚く全体で複数なぐくり。白色。	内) 10YR7/2
56	黒色土器	甌	下段平坦面	—	(2.35)	(6.40)	底部片	黒色土器有頸。底部回転系切り。ベタ高台、直径1mmの穴を含む。	内) K3/
57	黒色土器	甌	下段平坦面	—	(2.90)	6.20	底部片	黒色土器有頸。底部回転系切り。ベタ高台。直徑約1mmの穴を含む。内面は暗緑色と「1」字の凹起。	内) N4/
58	痕跡器	甌	下段平坦面	(37.60)	(5.55)	—	口縁1/8 底部片	口縁部。体部はボルト帶の構造で、口縁部を外側に持ち上げる。触上は横長、ナジ鋼頭で縫合に仕上げる。	内) 3TB6/6/ 外) NS-~3TB7/2
59	土師器	皿	下段平坦面	14.20	3.20	—	完形 底部片	複色系。手づくね。内面および外面部は横子で圓錐。外面部底面下半および底部は底板板縫隙が複数ある。	内) 5TB7/6~10YR7/4~5TB7/6
60	土師器	杯	下段平坦面	13.05	3.45	7.20	完形 底部片	瓶A 1・複色系。おそらく底部回転系切り。体部は直線的に上方に立ち上がる。完形であるが擦耗が著しい。	内) 7.5TB7/6
61	土師器	杯	下段平坦面	—	(2.75)	8.30	2/3 底部片	瓶A 1・白色系。底部回転系切り。体部は底面が斜めで、やや曲面しながら立ち上がる。内面はやや歪む。	内) 5TB7/3 外) 7.5TB7/4~10YR7/2
62	土師器	杯	下段平坦面	13.40	3.70	7.40	底部片	瓶A 1・複色系。底部回転系切り。内外面ともに擦耗が著しい。	内) 7.5TB7/6
63	土師器	杯	下段平坦面	—	(1.80)	(7.80)	底部片	瓶A 1・白色系。底部回転系切り。体部は斜め上方に立ち上がる。	内) 10YR8/3

表3 伝平等寺跡遺物類別表3

十種類3							
No.	種別	器種	出土地区	口径	高さ	底径	備考
64	土師器	碗	下段平坦面	—	(3.85)	(7.50)	底部片 ■B 2・褐色系、底部回転あ切り。体部は直筒的 に上方に立ち上がる。内面底部が大きくなむ。 内) 10YR7/4
65	土師器	碗	下段平坦面	—	(2.30)	6.49	底部片 ■B 3・白色系、底部回転あ切り。体部は斜め上方に立ち上がる。内面底部がやや傾む。 内) 10YR7/3
66	土師器	中瓶	下段平坦面	(1.90)	(1.90)	(7.40)	1/10 器を外反させておえら。
67	土師器	杯	下段平坦面	(12.90)	(4.45)	(7.20)	杯 A 1・白色系、施釉のため底部切り離し後詰は 不規則。体部は直筒的に上方にせらあがる。 内) 5TR6/6~7/6
68	土師器	小皿	下段平坦面	(8.30)	(1.70)	(5.80)	口縁1/4 ■A 5・褐色系、底部回転あ切り。体部は斜め上方に立ち上げ、口縁部をとがらせ気味におえる。厚手 の底盤。 内) 10YR7/4
69	土師器	杯	下段平坦面	(14.90)	(3.80)	(9.80)	杯 A 1・褐色系、施釉のため底部切り離し後詰は 不規則。体部は直筒的で、底部の割りに武部様の小さい 底みあり。 内) 10YR7/4
70	黑色土器	碗	下段平坦面	—	(2.25)	(5.80)	黑色土器 ■A 6・褐色系、底部回転あ切り。ベタ台面で、内 面には大きなミガキによって底面調整が行なわれる。 内) R2/ 外) 2.5TR5/2
71	土師器	杯	下段平坦面	14.50	4.05	8.45	細片 ■A 2・褐色系、底部回転あ切り。体部は内側し ながら立ち上りがるが底盤底部が丸く見える。 内) 5TR6/8
72	土師器	碗	下段平坦面	—	(2.35)	(5.65)	底部片 ■A 1・白色系、底部回転あ切り。体部は斜め上方に立ち上る。内底部に段は見られない。磨 きが美しい。 内) 5TR5/8
73	土師器	碗	下段平坦面	(15.60)	(5.00)	(7.00)	90A・白色系、底部回転あ切り。体部は直筒的に 立ち上り、横かね水焼き痕跡が現る。底盤粗面 のベタ底。 内) 7.5TR8/4
74	土師器	杯	下段平坦面	(14.70)	(3.70)	(6.40)	杯 A 2・白色系、底部の切り離し底部が不規則。体 部は直筒的に上方に立ち上がる。磨拭感が著しい。 内) 7.5TR8/6
75	土師器	碗	下段平坦面	—	(2.85)	(6.80)	底部片 ■B 1・褐色系、底部回転あ切り。体部は直筒的 に上方に立ち上げ。底盤に段を持たない。 内) 7.5TR6/6
76	土師器	中瓶	下段平坦面	(15.10)	(3.50)	8.50	褐色系、底部回転あ切り。体部は少し腰がある が、立ち上りがる。内底部に段は見られない。燒 結が段。 内) 7.5TR8/4 外) 7.5TR8/6~ 内) 5TR7/2
77	土師器	小皿	下段平坦面	8.60	1.50	—	■B 2・褐色系、底部回転あ切り。体部は直筒的 に上方に大きく開き、口縁部を少し外側にさせた 見える。 内) 7.5TR6/6~ 外) 7/6
78	土師器	小皿	下段平坦面	(8.70)	(1.50)	(5.40)	1/8 ■A 3・褐色系、底部回転あ切り。体部は直筒的 に立ち上る。内底部に段を持たない。燒結が 著しい。 内) 5TR6/6
79	須恵器	杯	下段平坦面	—	(1.90)	(5.40)	底盤 ■A・褐色系、底部回転あ切り。体部は斜め上方に立ち上 る。内底部に段を持つ。高台は底盤程度が段持 つ。 内) 5TR6/1
80	土師器	杯	下段平坦面	—	(1.95)	(6.00)	底部片 ■A・白色系、底部回転あ切り。体部は斜め上方 に立ち上る。内底部に段を持たない。燒結 が著しい。 内) 5TR6/6
81	土師器	杯	下段平坦面	—	(1.20)	(6.60)	底盤 ■A・白色系、底部回転あ切り。内側に白土を 漉入する。燒結が著しい。 内) 5TR6/6
82	土師器	杯	下段平坦面	—	(2.85)	(9.00)	1/3 ■A・白色系、底部回転あ切り。体部は斜め上方 に直筒的に立ち上る。 内) 10YR7/4
83	土師器	杯	下段平坦面	(14.80)	(3.45)	—	褐色系、底部回転あ切り。体部は直筒的 に立ち上る。内底部に段を持たない。燒結 が著しい。 内) 5TR7/6
84	土師器	碗	下段平坦面	—	(2.20)	6.30	底部片 ■B 1・白色系、底部回転あ切り。体部は斜め上方に立ち上る。内底部に段なし。白色土注入。 内) 5TR6/6
85	土師器	杯	下段平坦面	—	(2.40)	(8.10)	底盤 ■A・白色系、底部回転あ切り。体部はやや汚染 しながら立ち上る。 内) 7.5TR8/6
86	土師器	杯	下段平坦面	(13.80)	3.50	(8.90)	底盤1/2 ■A・白色系、底部回転あ切り。体部は「ノ」の 字形に立ち上る。 内) 7.5TR7/6
87	土師器	碗	下段平坦面	—	(4.20)	(6.40)	底盤1/6 ■B 2・褐色系、底部回転あ切り。体部は直筒的 に「ノ」字形に立ち上る。 内) 10YR6/3 外) 7.5TR7/6
88	土師器	甕	下段平坦面	(21.40)	(2.65)	—	口縁1/10 ■A・白色系、底部回転あ切り。口縁部を斜め上方に立 て握る。口縁部片。 内) 10YR6/4~6/6
89	土師器	甕	下段平坦面	(23.40)	(5.80)	—	口縁1/12 ■B 2・褐色系、底部回転あ切り。体部は直筒的 に「ノ」字形に立ち上る。外底に灰付羨。 内) 5TR6/4~6/6
90	黑色土器	碗	下段平坦面	(15.20)	(3.70)	—	口縁1/4 ■A 7・褐色系、内面に灰付羨を施すミガキによつ て口縁部調整を行なう。口縁部は小さく丸く仕上げる。 内) 5TR6/3
91	黑色土器	碗	下段平坦面	—	(3.25)	(6.10)	油部片 ■A 8・褐色系、内面に灰付羨を施すミガキによつ て口縁部調整を行なう。高台は証化したものが残 る。 内) R3/ 外) 2.5TR6/4~6/6

(単位)cm

表4 伝平等寺跡遺跡遺物観察表4

金属製品							
No.	種別	器種	出土地区	長さ	最大幅	残存	備考
M 1	鉄製品	釘	下段平坦面	(7.70)	0.65	9/10	頭巻き釘、先端欠損。
M 2	鉄製品	釘	下段平坦面	(6.10)	0.40	9/10	頭巻き釘、先端欠損。
M 3	鉄製品	釘	下段平坦面	(4.80)	0.75	3/10	頭を大きく打ち広げる、先端が曲がる。
M 4	鉄製品	釘	下段平坦面	(10.05)	0.65	完形	頭を大きく打ち広げる、先端が曲がる。
M 5	鉄製品	釘	下段平坦面	(8.50)	0.50	9/10	頭折り釘、先端欠損。
M 6	鉄製品	釘	T段平坦面	(7.80)	0.75	9/10	頭及び先端を欠損。
M 7	鉄製品	釘	下段平坦面	(8.30)	1.05	6/10	頭及び先端を欠損。
M 8	鉄製品	釘	下段平坦面	(9.80)	1.20	8/10	頭及び先端を欠損。
M 9	鉄製品	釘	下段平坦面	(8.20)	0.65	6/10	釘基部に木質部遺存、頭部・先端欠損。
M10	鉄製品	釘	下段平坦面	(8.20)	0.75	8/10	頭を大きく打ち広げる、先端欠損。
M11	鉄製品	釘	下段平坦面	(9.60)	0.85	8/10	頭折り釘、先端が大きく垂がり欠損する。
M12	鉄製品	釘	下段平坦面	(11.75)	0.65	9/10	頭巻き釘、先端欠損。
M13	鉄製品	釘	下段平坦面	(12.25)	0.85	9/10	頭巻き釘、報詔が焼行する。先端欠損。
M14	鉄製品	釘	下段平坦面	19.65	0.70	完存	頭折り釘、軸部に木質が残る。
M15	鉄製品	盤状製品	下段斜面	8.80	2.40	完存	軸部が向曲する。
M16	鉄製品	鉄繩	下段平坦面	(4.40)	0.60	5/10	縄身の部分のみ残存。
M17	鉄製品	鋼線	下段平坦面			完形	寛永通宝。鎌が落しい。

(単位はmm)

## 第5章　まとめ

### 1. 伝平等寺跡遺跡の堂舎

伝平等寺跡は前述のとおり、「徳畠に平等寺という寺院があったが、江戸時代の文化年間（1804～1817）まで背後の山の上（伝平等寺跡遺跡の場所）にあった。しかし、土砂崩れのために山の上から麓に移動した。」（足立元二氏・徳畠在住、図版4参照）といわれている。そして、足立元二氏藏の近世文書（後述足立元二文書）によれば、平等寺は觀音堂として近世段階には存在したことが確かめられる。この文書では、延享年間（1674～1680）に佐治村の堺屋善兵衛（金貸業か？）が平等寺隣接の山林を村に寄付し、境内地として利用してもらうよう望んでいる。所有者の質流れとして預けられた土地であったが、幸いなことに再び村に帰されたわけである。平等寺の存在と近世には觀音堂であったことがこれによって知ることができ、当遺跡を知る上で貴重な史料である。しかし、この他に寺の存在について、その寺號や存在を明らかにする史料がなく、詳細は不明な部分が多い。また、現在は麓に移転した寺院は近年まで存在したというが、これについても詳細も知ることは困難である。敷地脇に残る石垣や石段にわずかにかつての姿を偲ぶことができる状態となっている。

一方、第5図の小刺は平等寺を移転して建てたものであるが、内部に同寺から移されたという位牌が数点納められている。この位牌の1つに堀秀利のものが含まれるが、この人物は谷の南側に位置する山垣城の城主と伝承される。位牌は明らかに近世以降のものであり、堀氏のものを納める宋服などについては不明で、平等寺との関わりについても判然としない。このほか、平等寺に関係する史料は皆無で、存在を伝える記録が残されていなかった。また、発掘調査では中世段階は成果がみられたが、この時代についても史料が皆無といわざるをえない。従って、下段平坦面下層から出土した寺院関連の建物が平等寺の前身であったかどうかを検討することは史料からは確かめることができない。

また、前述のように、13世紀初め以降、堂舎が継続して維持されたかどうかについては考古学的に確認することはできなかった。さらに、下層平坦面の寺院建築物が、平等寺と関連があるかどうかについても、現段階では不明とせざるをえない。

調査の成果から下段平坦面の経過をもう一度振り返ると、江戸時代以来、平等寺が存在したといわれる下段平坦面は12世紀中頃には平坦地が造成され、堂舎が建立（下層平坦面下層）された。その後13世紀初めまでに建て替え（下層平坦面上層・1回以上の可能性もある）が行われるが、この頃土砂崩れによって堂舎は損壊した可能性がある。ただし、この時は再建（上層遺構面）されたようである。その後のこの平地の状況は不明である。

近世には同じ場所に造成平坦面をそのまま利用して平等寺が建っている（同上層遺構面）。だがこの堂舎も再度の山崩れで廃絶し移転せざるをえなくなり、近世後半には、麓に移転したという経路をたどる。

そして、前述の通り13世紀前半に再興されて以後、寺院継続の事実は確認できなかったが、下段平坦面に近世になって再度寺院が出現することからすると、少なくともこの場所が宗教的な機能を保持し続いたことは疑いがないだろう。このため、継続性（法灯や經營主体の継続性）は不明ながら、この場所の機能あるいは意識は維持されていたと考えるのが自然と思われ、何らかの形で寺院施設は維持され続けたと考えられる。

## 2. 敷き詰められた土器

今回の下段平坦面下層の礎石建物周辺から出土した土器群は、細片となった土師器を敷き詰めたような状態で出土している。このような事例について検討してみたい。

薬師前遺跡<sup>(1)</sup>（朝来市）では本遺跡と同じく12世紀後半始めから13世紀始までの寺院堂舎建築が見つかっている。ここでも丘陵裾の緩斜面に平坦地を造成して6間堂を建立する。この建物の礎石抜き取り穴周辺には多量の炭・土器（土師器皿・杯など）が混ざった状態の土砂が堆積していた。土器は大半が細片で碎かれたような状態になったものであった。さらに、14世紀代にはこの平坦面を埋めて、上方に同様の堂舎が建て替えられる。この堂舎においても建物の敷地に炭・土器が敷き詰められた状態であった。

円満寺東の谷遺跡<sup>(2)</sup>は多可町に所在する寺院遺跡で14世紀前後に基壇を持つ堂舎が建てられる。この堂舎の周辺には大量の土師器（皿・杯）が散布した状態で出土している。前二者のように建物敷地だけではなく境内地一帯に土師器が広がる事例もあるが、これらは敷き詰めたような状態であることでは酷似した事例といえるだろう。

このような事例で顕著なものが座神遺跡である。この遺跡は14世紀に機能するが梵鐘鉄造構なども検出され、調査区自体はどちらかというと寺院に付属した生産遺跡と考えられる。ここでも多量の土師器皿を中心とする土器類が石瓦を用いて構築された段状遺構周辺から出土している。土器類は完形のまま捨てられたものが多いと推測されるが、生活によって消費されたものではないようだ。

また、満願寺<sup>(3)</sup>（川西市）では本堂下層遺構をトレント調査によって検出しているが、中世段階で3期、近世以降で1期の建物遺構（現本堂を除く）が検出されている。最も古い建物1が平安時代後半に建てられ、最後の建物3は南北朝時代の建立である。この建物3に伴うⅢ層（15世紀）からは多量の土師器皿類、・建物3建築直前のV層（14世紀後半）からは多量の土師器皿類・瓦器類などが出土し、さらに建物3の形成面には鎮壇具が出土している。トレント調査であるので詳細は不明であるが、各時期の建物に焼上面を伴うことや土器類が多量に包含されていた事実は重視される。すべての遺構面を疑うわけではないが、堂舎建立に先立って特に建物3では土器類を包含した炭・焼土層が形成されていた可能性が疑われる。

このように、12世紀後半から14世紀前後の寺院建築には基壇ないし敷地周辺に、土師器などの土器類を含む炭層が散布される事例が見受けられる。

これらのことなどをどのように捉えたらよいのだろうか。伝平等寺跡遺跡や薬師前遺跡などでは建物が建った遺構面自体に炭・焼土や焼上面が広がり、遺構面自体が被熱状態であることから、栄根寺遺跡（川西市）のように火災が原因で生じた焼土とも疑われた。しかし、これらの事例では礎石そのものは被熱しておらず、被熱面は場所が限定された。つまり建物完成後の現象によって生じたものではなく、建設以前にすでにこのような状態になったのである。そして、薬師前遺跡や伝平等寺跡遺跡の上器は細かく碎かれたような状態の個体が多く、生活で消費されたものとは考え難い。このため、少なくとも2つの事例は火災によって炭層が形成されたのではなく、建物構築に伴う“地業”の一環として行われた作業の痕跡と推定される。

また、円満寺東の谷遺跡や岩座神遺跡<sup>(4)</sup>では敷地周辺も含めて土器類が多量に出土している。これらでは炭層の検出は顕著ではないが、出土した土器は生活によって消費されたものではない。このことからすると、やはり土師器が“地業”に伴って使われている事例と考えられる。さらに、満願寺でも火災

による焼失なのか“地業”に伴う行為なのかはトレンチ調査であるだけに、今後に検討の余地を残していると考えられる。

類例がまだ少数あるためさまざまな検討を行うには材料不測ではあるが、地業においてこのような土器の敷き詰め作業が行われていた可能性を指摘しておきたい。

### 3. 県下の小規模寺院

伝平等寺跡遺跡は12世紀末の創建以来、1棟の堂舎で構成される小規模な寺院である。このような丘陵上の小規模寺院における県下の事例としては丹波の三岳修験に関わる福泉寺本堂跡<sup>19</sup>（篠山市）、攝津北部の金剛寺遺跡<sup>20</sup>（三田市）、法道仙人の開基伝承を持つ金蔵山金蔵寺遺跡<sup>21</sup>（多可町）などがあり、14世紀頃を初現とするものが多い。そして当然のことながらこれらは山岳修験に関わる遺構である。

これに対して伝平等寺跡遺跡は集落背後の小高い丘陵上に立地し、膝下には集落が存在したことが指摘されている。付近に修験にともなう行場などの存在が疑われないとからすると、山岳修験との関わりは薄いようである。さらに伝平等寺跡遺跡の立地をもう少し振り返ってみると、集落にやや張り出した尾根端部に立地し、西側には遠阪峠を越えて但馬に抜ける山陰道が通っている。さらに、遺跡の南側で山陰道は、堂舎を真北に見ながら通っており、本寺院の選地の一端を窺うことができる。このように、集落に隣接することと、山陰道という幹線街道に面した要衝にある点が、大きな特徴といえるだろう。

同様の寺院調査事例として前述の薬師前遺跡がある。この遺跡（朝来市）は播磨から但馬に生野峠を通って入る街道に面した丘陵斜面に立地する。堂舎の南側には同時期の集落が検出され、本遺跡と同様に集落に密接した小規模寺院である。この遺跡では街道に向って東側に間口を持つ堂舎が検出された。やはり瓦葺ではないが大型の礎石が据えられ本格的な建築であることが知られ、背後の尾根上に経塚などが見つかっている。このように薬師前遺跡は寺院と経塚などの信仰施設、さらに集落などが一体となった遺跡であるとされる。

2つの遺跡は幹線街道に面し、村落と密接に関わるという点で共通する。時期的にもほぼ同じ時期のものであるが、県下でこの時期の小規模寺院の調査事例は2例を除くとあまり知られていない。この時期、伝平等寺跡遺跡に隣接する集落遺跡である土井遺跡は、すでに東の谷側から現集落に移動しており、大きな画期を迎えていた。そして、北側の川ノ口遺跡の変遷に従うならば、この時に集落はより拡大したことが推測される。これと機を一にして本遺跡は出現しており、集落の拡大—繁栄—と本遺跡の出現は密接に関わる可能性がある。

また、今回検出された礎石建物・前身建物は地域の集落建物とは隔絶した構造をもつのは自明であるが、堂舎が単体であることや、瓦葺ではないことなどからすると、中央の権門などが建立した寺院ではない可能性が高い。おそらく、平安末期に出現した地域の“富貴の輩”など、在地に根ざした人々が支えた寺院であったと推定される。

古代末期から中世にかけての京都では辻祭や地蔵講、六地蔵めぐりなどの庶民信仰を行う場として堂が出現し、庶民生活に密接に関わる存在となっていたという<sup>22</sup>。こういった文化が地方にも派生し、庶民信仰の舞台空間として根付いたという指摘がある<sup>23</sup>。鎌倉仏教はまさにこのような地域の堂を媒介に布教活動を進めたといわれるが、平安時代の段階では、いまだこれらの堂は、庶民信仰に支えられた原始的なものであったとされる。

このような文化的な意識が平安時代末期から鎌倉時代にかけての村落の形成期に受容され、拡大し始

めた村落内にさまざまな信仰をもった堂を出現させたといわれている。特に、交通の要衝に位置した本遺跡や薬師前遺跡などはその立地から、早い段階でこのような宗教施設一堂を受容する素地が生まれたと推定される。このため、これらの寺院の創建は莊園領主のような非在地権力ではなく、地域社会に出自をもつ「富貴の輩」などの人々が担い手ではないかと推測される。

薬師前遺跡には堂舎の地下に財宝が眠る伝承が伝わり、「みつばうつぎのその下に金銀財宝が眠る」と言い伝えられてきた。現在でも村人たちの信仰は絶えず、生野鉱山に近いこの地域に散布する鉄滓(かなくそ)を奉納すると、耳が聞こえるようになるという。つまり、現世利益をもたらすお堂として生き続けているのである。伝平等寺跡も最近まで地域の信仰集めていたことが、足立元二氏など地元の人からの御教示で知ることができた。地域社会によって生み出され、村落とともに行き続けたこの2つの寺院は、地域社会や村落とともに行き続けたからこそ存続したともいえる。非在地の莊園領主などが建立した寺院とは、異なった存続の仕方がそこには垣間見える。そして、遠隔地の権力を後ろ盾とする寺院は時代ごとの波を受けてしまいがちで、盛衰が著しいと推測される。この意味では、2つの堂舎は大規模ではないが街道に面し交通の要衝にあったという立地も幸いして、比較的安定した信仰の場として維持されたと思われる。

註

- (1) 兵庫県教育委員会「薬師前遺跡」1998
- (2) 西安田長野遺跡調査会・妙見山麓遺跡調査会「円満寺東の谷遺跡」1999および、西安田長野遺跡調査会・妙見山麓遺跡調査会「宮ヶ谷遺跡・長坂谷遺跡・円満寺東の谷遺跡(関連遺跡)・西安田遺跡」2000による。
- (3) 川西市教育委員会「川西市滴翠寺」1985
- (4) 加美町教育委員会「岩座神光寺遺跡」2005
- (5) 錦山町教育委員会「錦山町遺跡詳細分布調査報告書」1989
- (6) 六甲山龍遺跡調査会「三田市『旧金剛寺跡』-E地区を中心とする調査-」1997年
- (7) 多可郡加美町教育委員会「金剛山金成寺遺跡」1998
- (8) 竹内光浩「平安京庶民信仰の場」『中世の生活空間』戸田芳実編1993
- (9) 戸田芳実「備後国太田莊の古道-甲山町から尾道へ」『歴史と古道 歩いて学ぶ中世史』人文書院 1992
- (10) 前悔(1) 文獻による。

「足立元二氏所藏文書」

寄進一札之事

詔うしより本主其村左衛門分

一 村山宅ヶ所立木共一式

右は其村平左衛門貢流にて手前抱置候所

此度、平等寺觀音様へ

寄進仕候間、水々平等寺

題に御用にて被成候、依而

為念寄進状如件

佐治町

堺屋

善兵衛

延享四年(一七四七)

卯正月日

徳畑村御

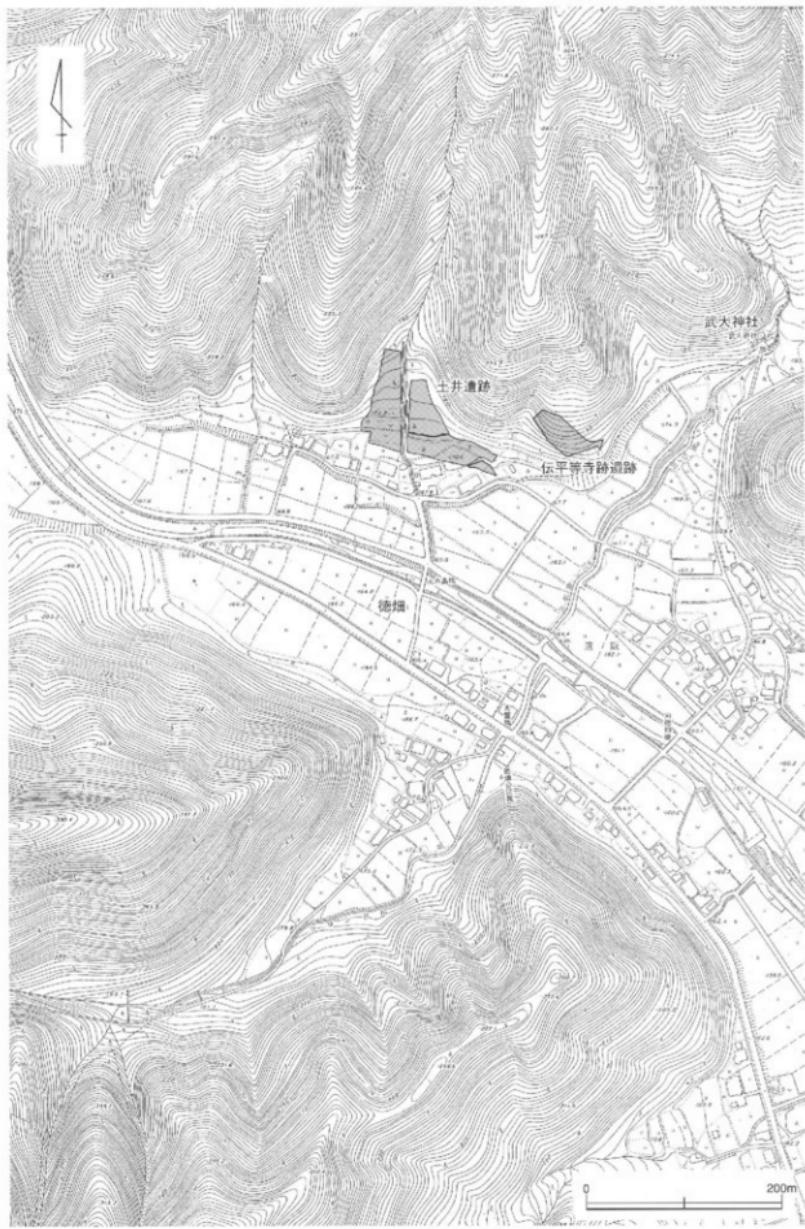
•

(花押)

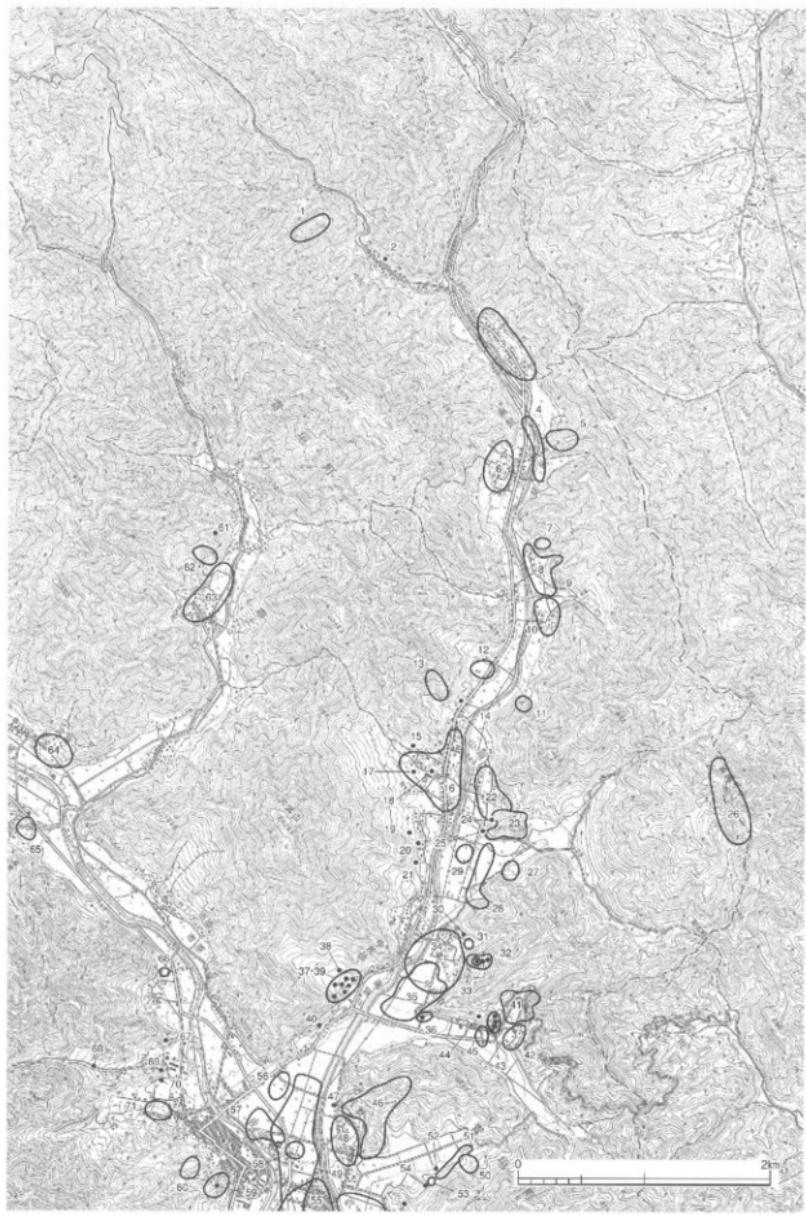
\* 山林の寄進状である。徳畑村の村役(庄屋もしくは惣代か、氏名は被損のため不明)宛に佐治村の堺屋善兵衛(金貸業を営んでいたか?)が署名した古文書。

内容は徳畑村(丹波市青垣町徳畑)の平左衛門が所有する山林が質流れとなり、質(担保)としたまま物を抱えていたが、平等寺の隣接地であったので、境内地としてでも使用していただけたら解説ですでの寄進いたします。というものである。なお、堺屋を屋号に使用する家は青垣町佐治には現存しない。また、京廻は別説に疑問も残るが境内の当字かと思われる。

# 図 版



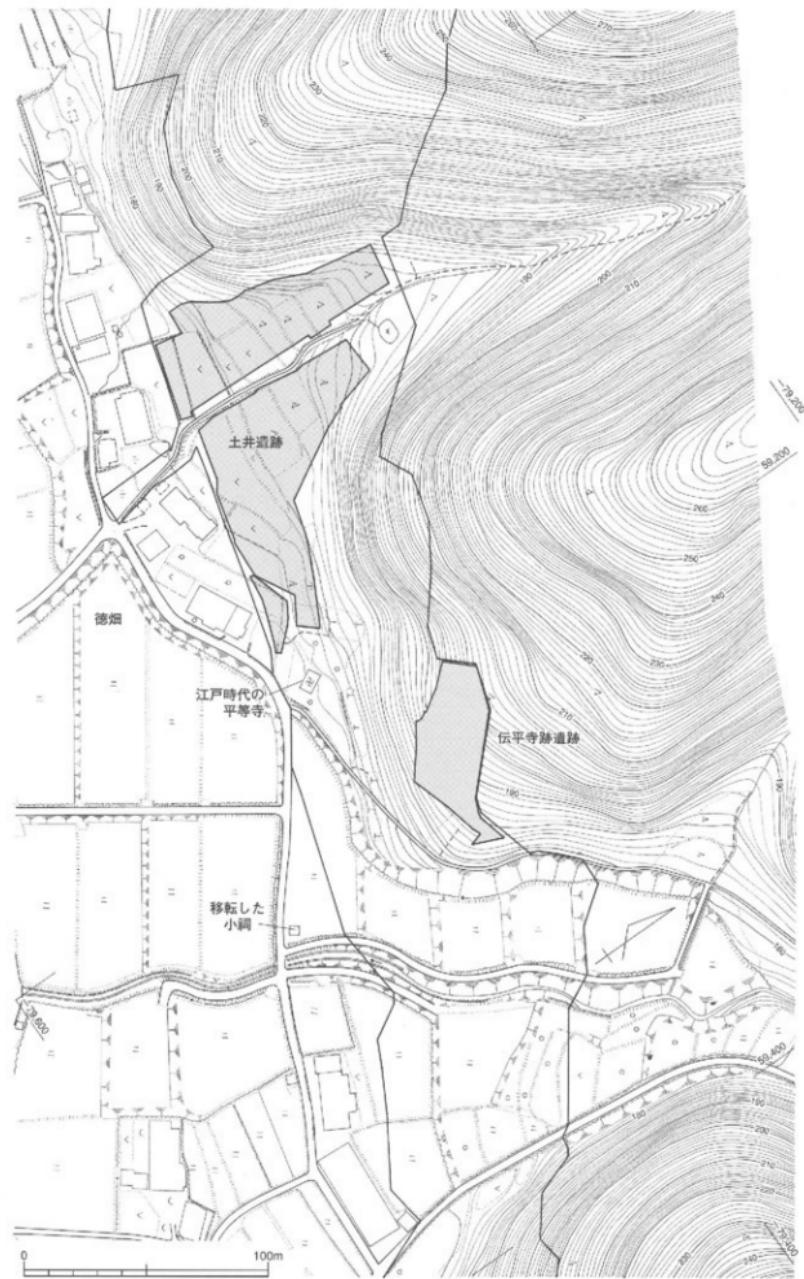
図版1 調査区周辺の地形 (1/5,000)



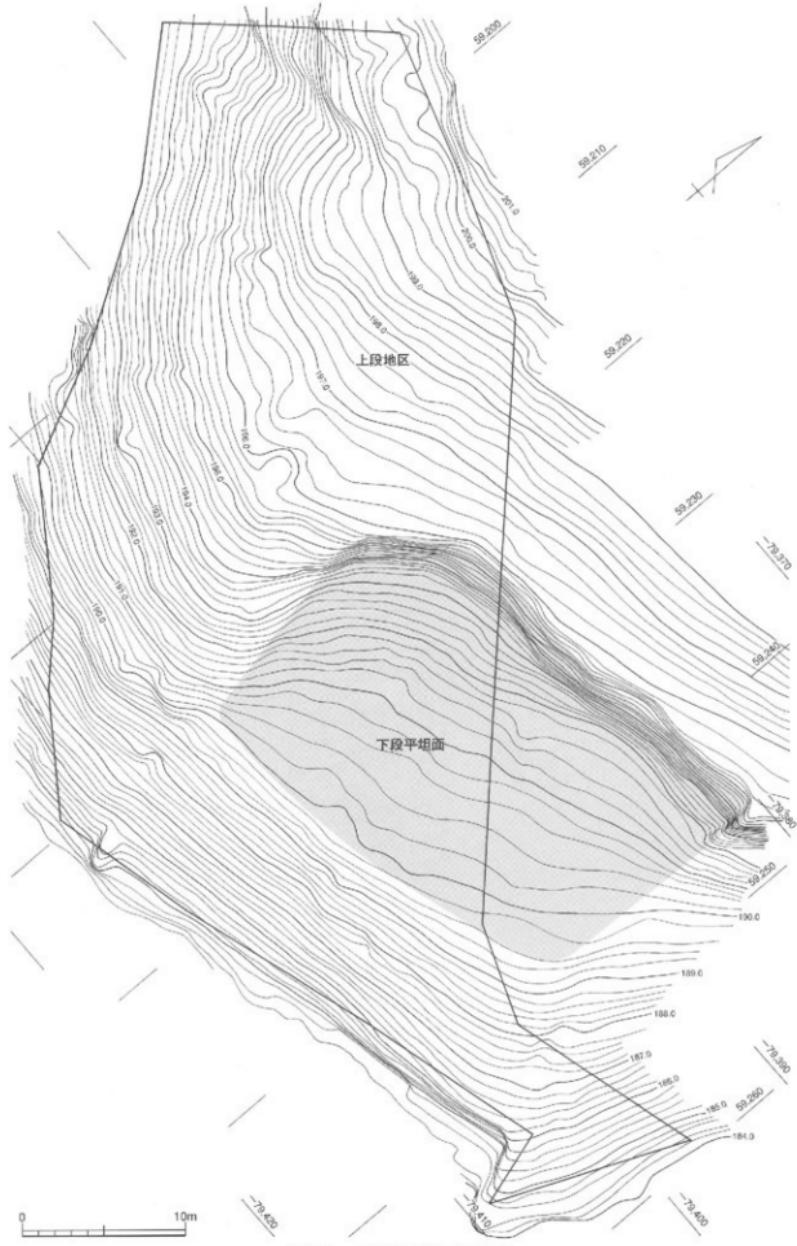
図版2 伝平等寺跡遺跡周辺の主要遺跡一覧

番号	遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の所在地	時代	種類
1	780054	赤坂城跡	丹波市青垣町遠坂	中世	城館
2	780055	鶴見寺跡	丹波市青垣町遠坂	中世	経家
3	780056	市上・町ア瀬跡	丹波市青垣町遠坂	近世	散布地
4	780057	田ノ口城跡	丹波市青垣町遠坂	奈良～中世	集落・城館・跡塚
5	780037	田ノ口城跡	丹波市青垣町遠坂字田ノ口奥山	中世	城館
6	780058	ザイノ城跡	丹波市青垣町遠坂	中世～近世	散布地
7	780059	酒呑城跡	丹波市青垣町遠坂	中世	城館
8	780060	土井古跡	丹波市青垣町遠坂	縄文～近	集落・墳塚
9		伝平等寺跡遺跡	丹波市青垣町遠坂	中世	集落
10	780061	別ノ上遺跡	丹波市青垣町遠坂	中世	散布地
11	780063	中ヶ谷城跡	丹波市青垣町山原	古墳～近世	城館
12		丹波市青垣町山原	古墳	古墳	散布地
13	780036	松倉城跡	丹波市青垣町山原寺奥山	中世	城館
14	780017	堀殿古墳	丹波市青垣町山原字堀殿	古墳	古墳
15	780016	店崎古墳	丹波市青垣町山原字店崎	古墳	古墳
16	780064	源藤遺跡	丹波市青垣町山原	古墳～近世	散布地
17	780013	横敷古墳	丹波市青垣町山原字横敷	古墳	古墳
18	780014	上原古墳	丹波市青垣町山原字上原	古墳	古墳
19	780015	西脇古墳	丹波市青垣町山原字西脇	古墳	古墳
20	780068	荒神山・谷古墳	丹波市青垣町山原	古墳	古墳
21	780025	天福寺跡	丹波市青垣町山原字白石	中世	寺院
22	780065	山垣遺跡	丹波市青垣町山原	奈良～近世	散布地
23	780035	山垣城跡	丹波市青垣町山原字城山	中世	城館
24	780012	針ノ木田古墳	丹波市青垣町山原字針ノ木田	古墳	古墳
25	780066	東寺古墳	丹波市青垣町山原	古墳	古墳
26	780062	島嶼子山城跡	丹波市青垣町山原	中世	城館
27		山垣城跡	丹波市青垣町山原	奈良	散布地
28	780067	城ノ墨遺跡	丹波市青垣町山原	奈良～中世	集落
29	780042	山垣城跡	丹波市青垣町山原字墨の内	中世	城館
30	780070	見努力尾古墳	丹波市青垣町山原字佐治	古墳	古墳
31	780071	東寺遺跡	丹波市青垣町山原	古墳～中世	散布地
32	780072・780137・780138	中佐治1～3号墳	丹波市青垣町山原字佐治	古墳	古墳
33	780073	中佐治城跡	丹波市青垣町山原字佐治	中世	城館
34	780069	中佐治遺跡	丹波市青垣町山原字佐治	奈良～近世	散布地
35	780039	中佐治主里	丹波市青垣町山原字佐治	中世	条里
36	780074・780139	ヒハビ1・2号墳	丹波市青垣町山原字佐治	古墳	古墳
37	780053	応相寺遺跡	丹波市青垣町山原字応相寺	古墳	集落
38	780027	応相寺跡	丹波市青垣町山原字応相寺	近世	寺院
39	780093・780128～780133	永作1～7号墳	丹波市青垣町山原字永作	古墳	古墳
40	780041	代官屋敷跡	丹波市青垣町山原字早坂	中世	城館
41	780011	平坂古墳	丹波市青垣町山原字早坂	古墳	古墳
42	780075	有内洞古墳	丹波市青垣町山原字佐治	奈良～近世	散布地
43	780076・780140～780142	平野1～4号墳	丹波市青垣町山原字佐治	古墳	古墳
44	780077	針ノ木田古墳	丹波市青垣町山原字佐治	古墳	古墳
45	780078	平野遺跡	丹波市青垣町山原字佐治	奈良・平安	散布地
46	780034	寺内城跡（小和田城跡）	丹波市青垣町櫛野子谷曾	中世	城館
47	780026	櫛野寺跡	丹波市青垣町櫛野子谷曾	近世	寺院
48	780096	小和田遺跡	丹波市青垣町櫛野子谷曾	奈良～近世	散布地
49	780038	沢野冬里	丹波市青垣町櫛野子谷曾	中世	条里
50	780088	沢野城跡	丹波市青垣町沢野	中世	城館
51	780087	今村谷古墳	丹波市青垣町沢野	古墳	古墳
52	780089	沢野唐古墓	丹波市青垣町沢野	古墳	古墳
53	780090	オオサルタ姫塚	丹波市青垣町沢野	中世	城館
54	780091	オオサルタ古墳	丹波市青垣町沢野	古墳	古墳
55	780052	沢野遺跡	丹波市青垣町沢野	奈良～中世	集落
56	780079	大海遺跡	丹波市青垣町沢野	古墳～平安	散布地
57	780080	中市場遺跡	丹波市青垣町沢野	奈良～中世	散布地
58	780081	カシヤカイ遺跡	丹波市青垣町沢野	奈良・平安	散布地
59	780018	丸山1～7号墳	丹波市青垣町佐治字丸山	古墳	古墳
60	780033	佐治城跡	丹波市青垣町佐治字丸山	中世	城館
61	780029	常光院跡	丹波市青垣町佐治字常光院	近世	寺院
62	780121	桶子城跡	丹波市青垣町桶子	中世	城館
63	780122	桶子遺跡	丹波市青垣町桶子	奈良～近世	散布地
64	780123	文宝遺跡	丹波市青垣町文宝	奈良	散布地
65	780043	樽子型銅鑄造	丹波市青垣町樽子字大道端	近世	製錬
66	780082	佐治神社祭祀遺跡	丹波市青垣町小倉	奈良～近世	祭祀
67	780010	段ヶ谷古墳	丹波市青垣町小倉字段ヶ谷	古墳	古墳
68	780084	石松山大通寺跡	丹波市青垣町小倉	近世	寺院
69	780083	段ヶ湖古墳	丹波市青垣町小倉	古墳	古墳
70	780023	光明寺跡	丹波市青垣町小倉字ボウケ谷	近世	寺院
71	780085	梅ノ木本遺跡	丹波市青垣町佐治	奈良～中世	散布地

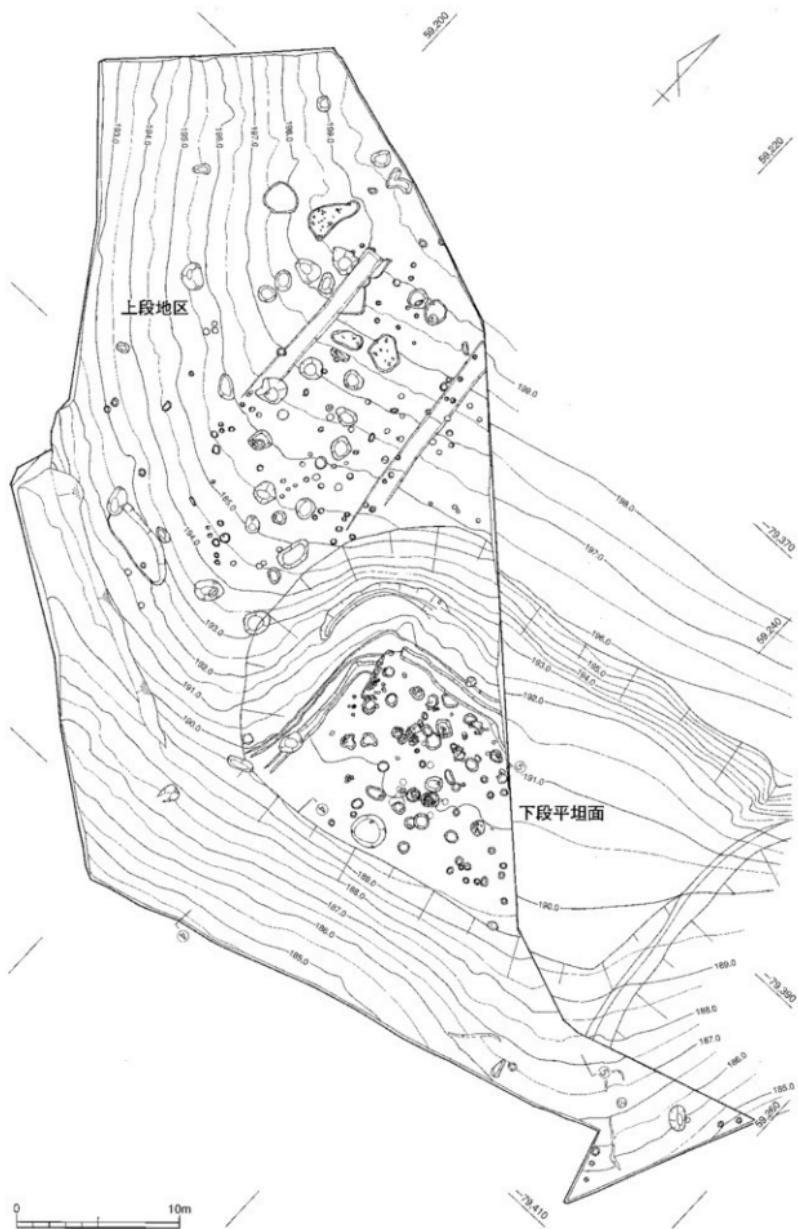
図版3 伝平等寺跡遺跡周辺の主要遺跡一覧



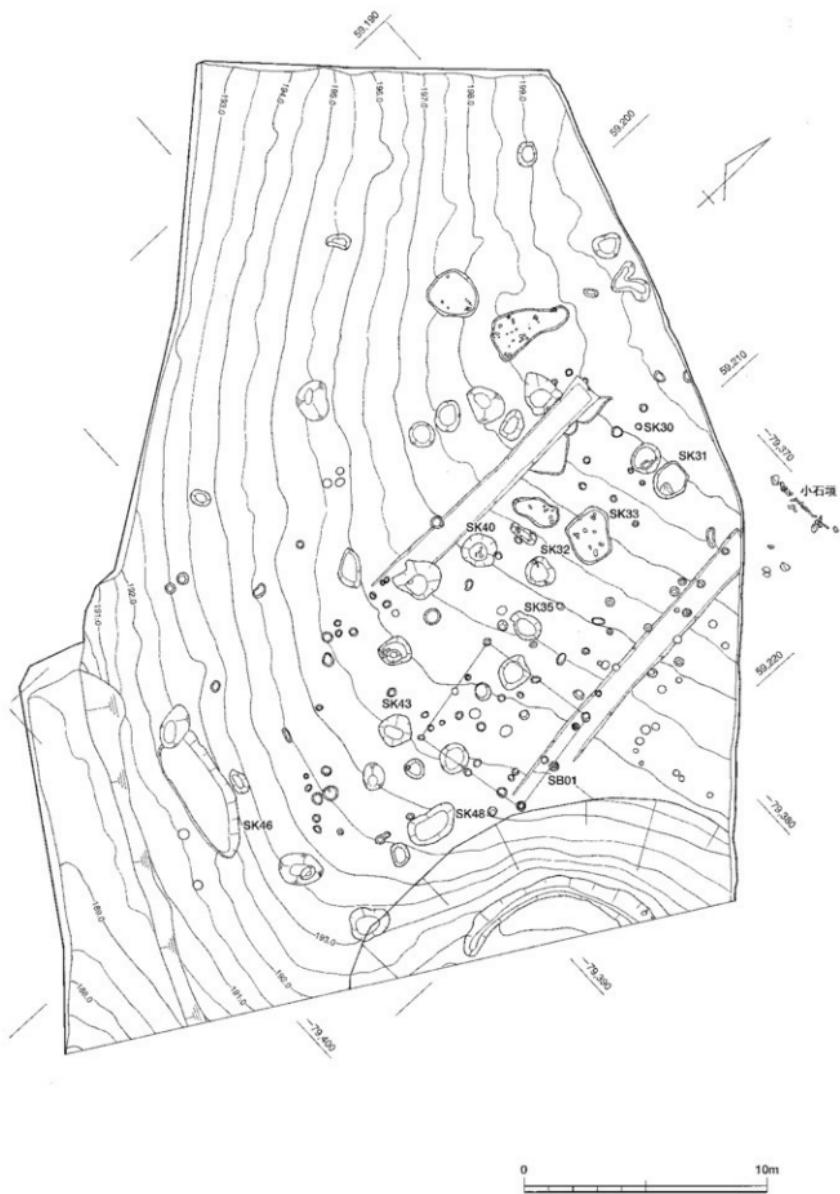
図版4 伝平等寺跡・土井遺跡 (1/2,000)



図版5 現況地形図 (1/300)

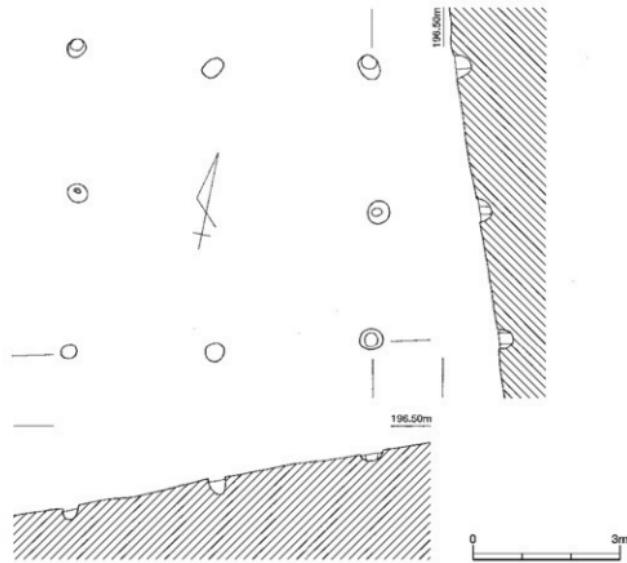


図版 6 調査区全体図 (1/300)

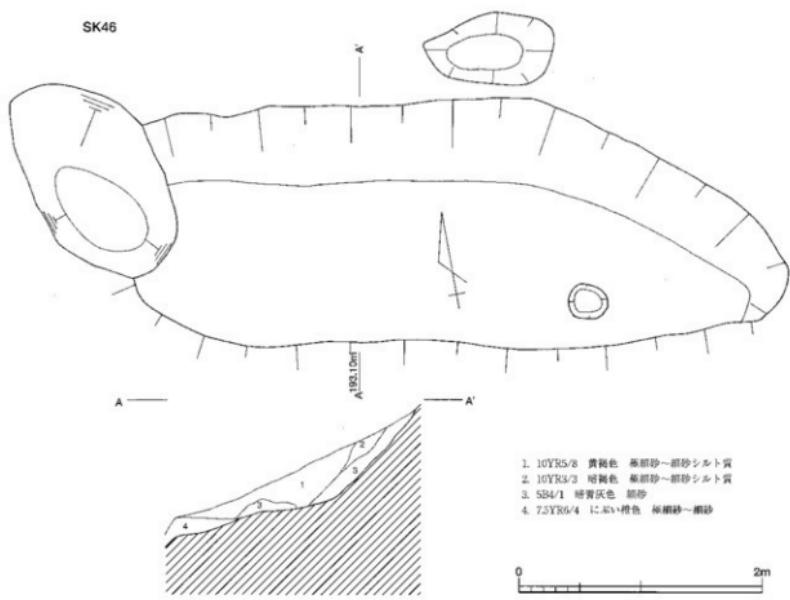


図版7 上段地区遺構平面図 (1/200)

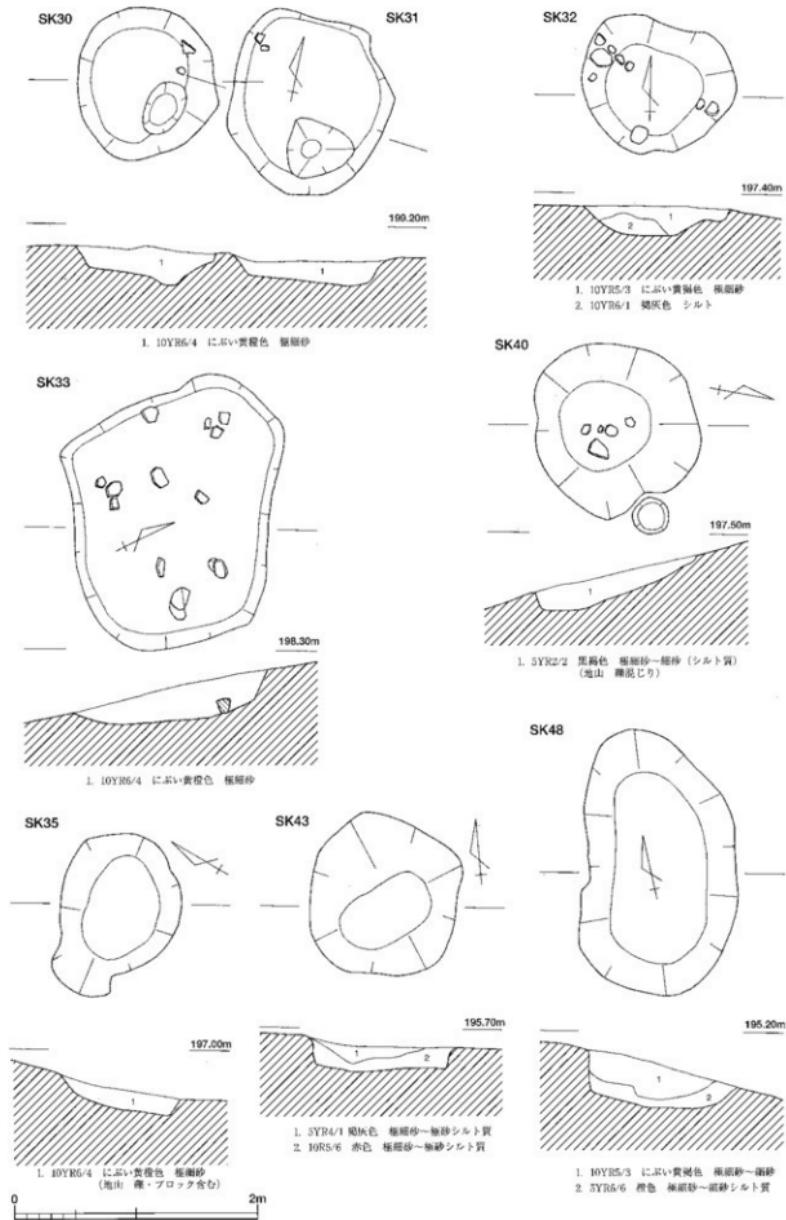
SB01



SK46



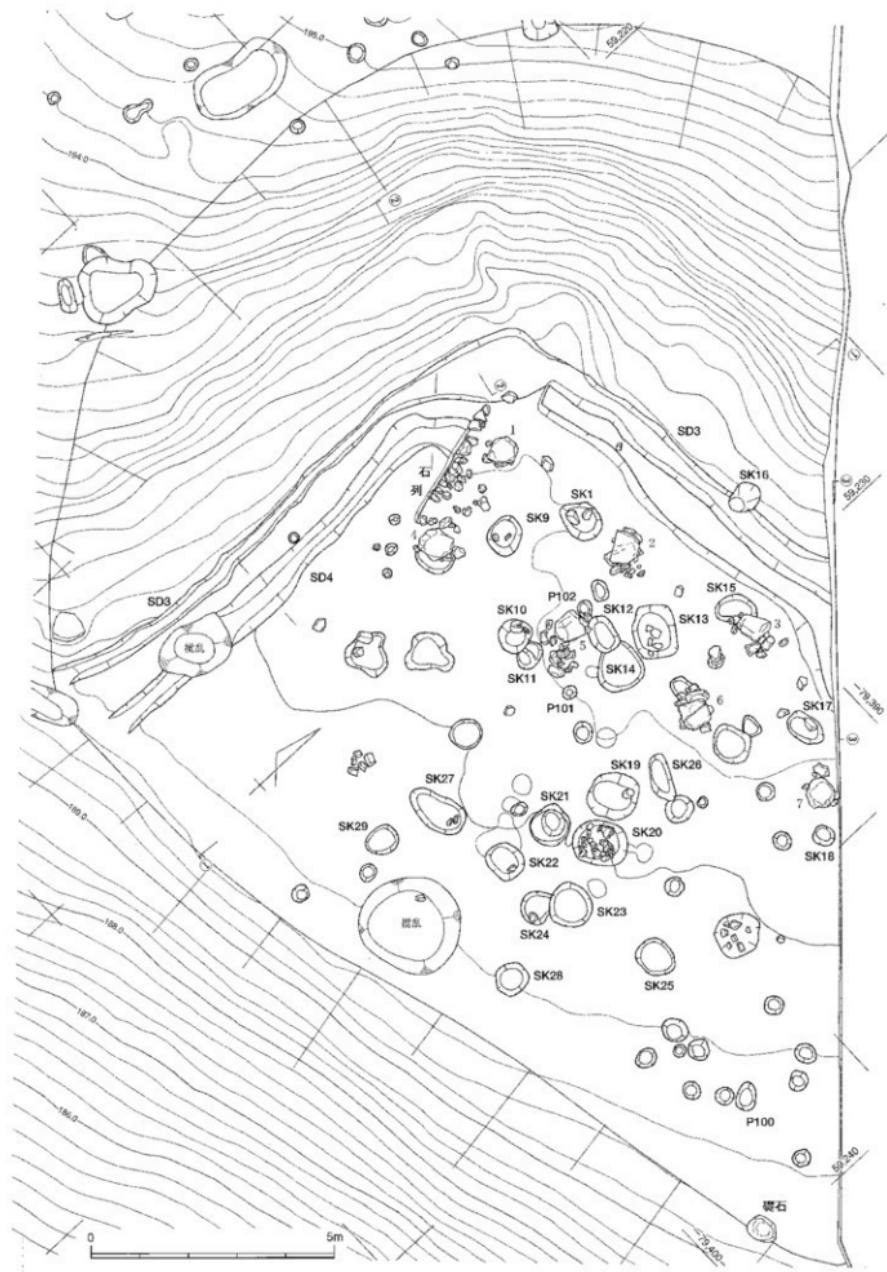
図版8 上段 挖立柱建物跡 (1/100) 平断面図・土坑 (1/40) 平断面図



図版9 土坑 (1/40) 平断面図



図版10 下段平坦面 上層平面図 (1/100)



図版11 下段平坦面 下層平面図 (1/100)

断面①

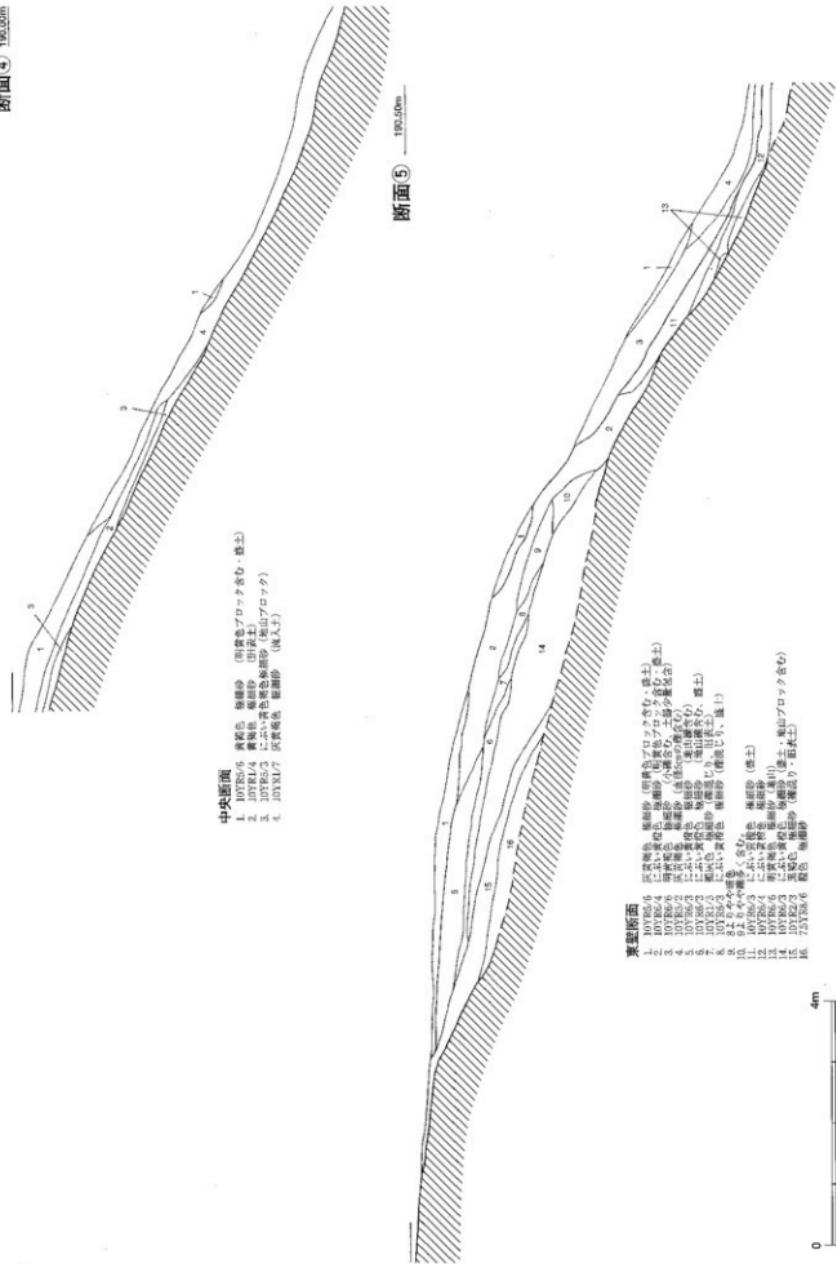


断面③

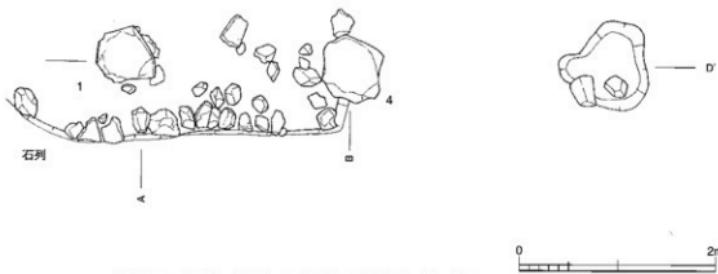
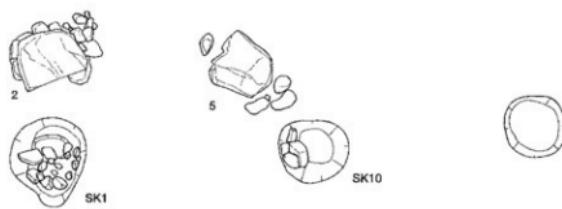
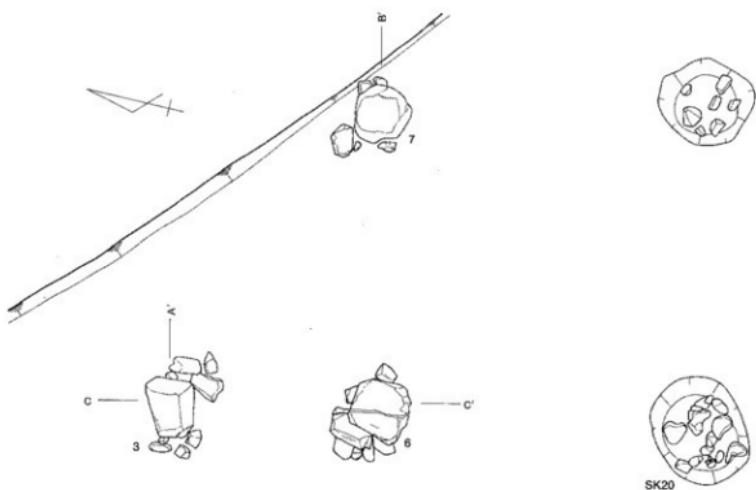


図版12 下段 平坦面断面図1 (1/60)

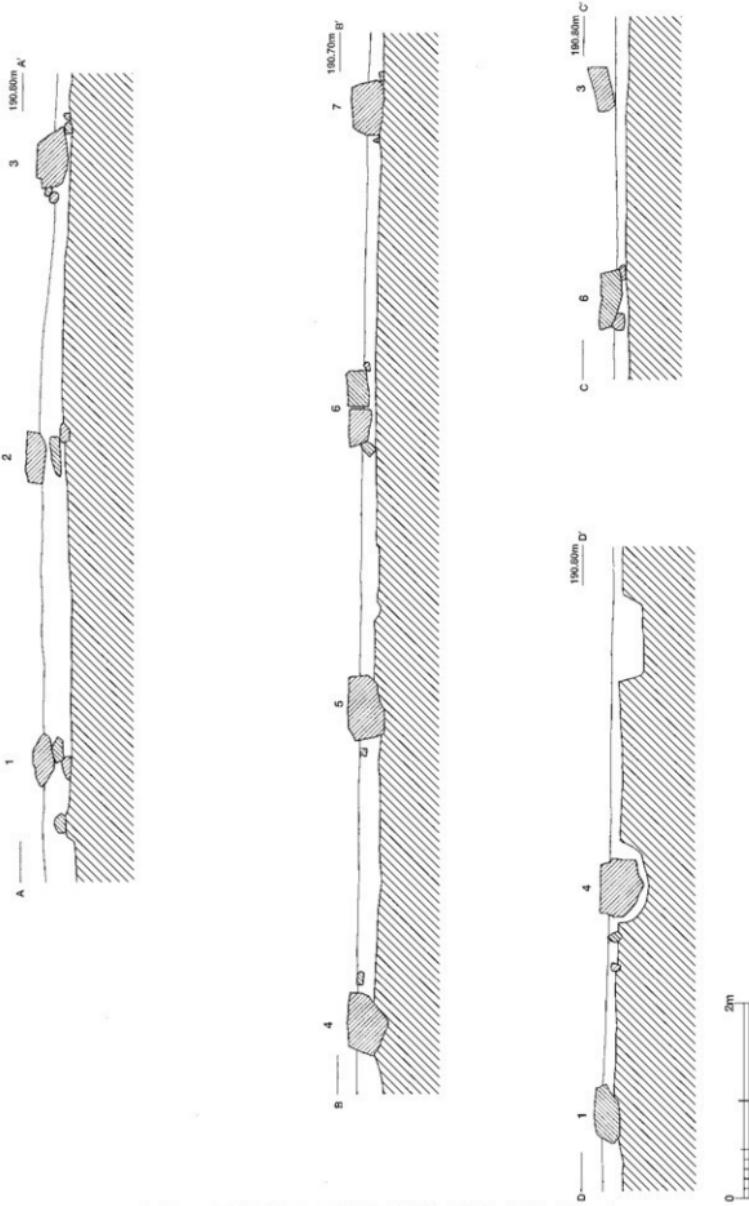
断面④ 190.00m



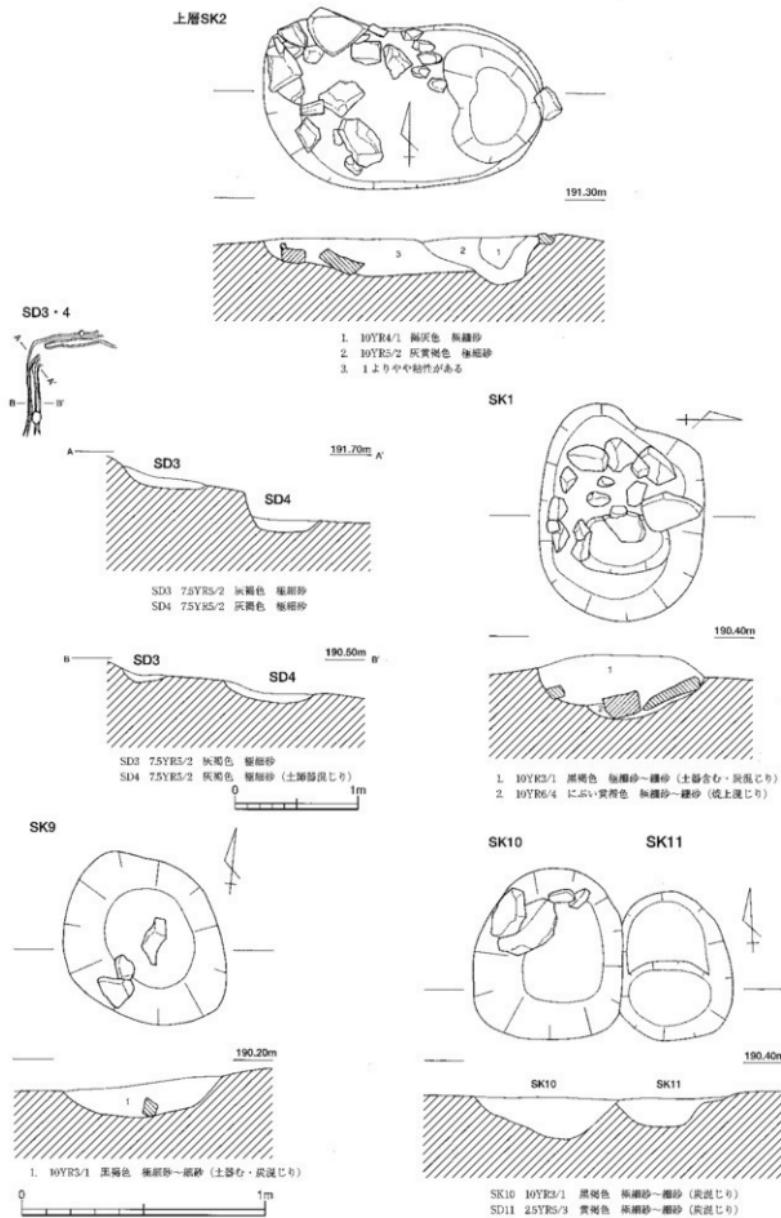
図版13 下段平坦面 土層断面図2



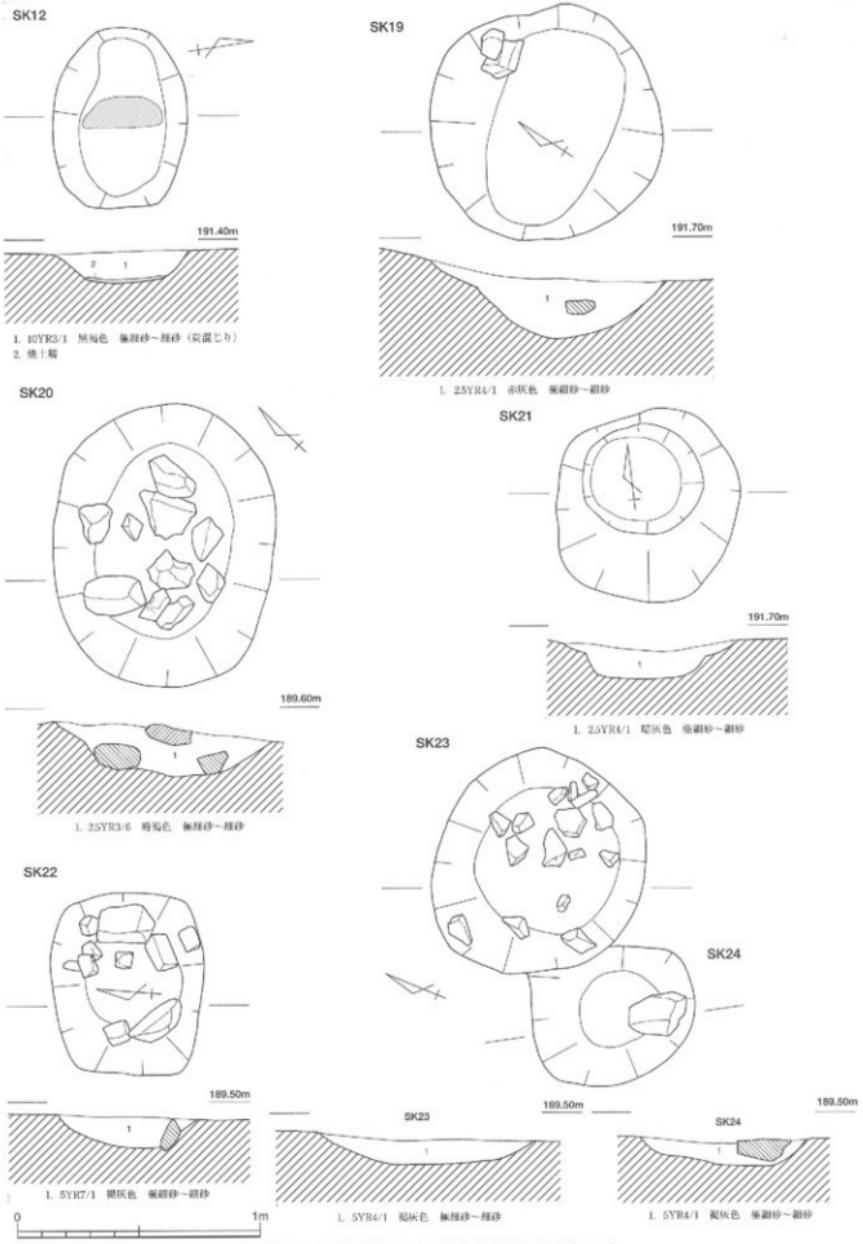
図版14 下段平坦面 下層礎石建物跡（堂舍）平面図（1/50）



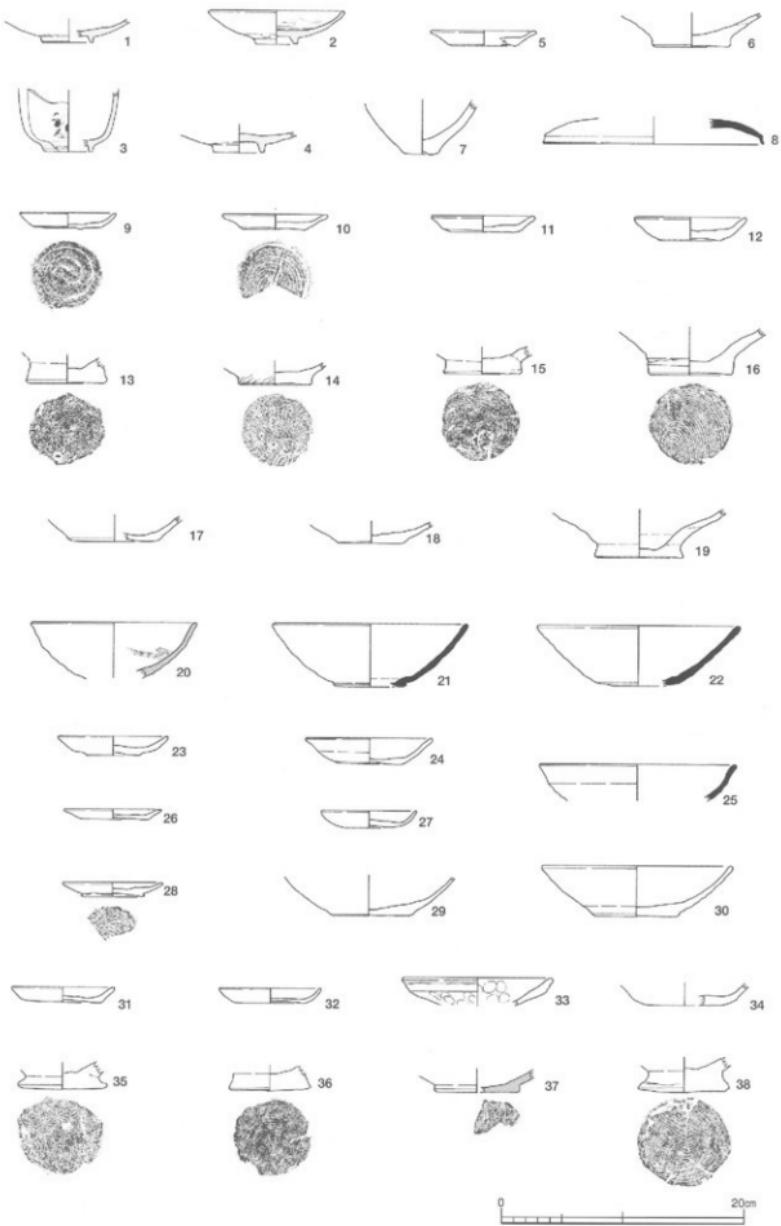
図版15 下段平坦面 下層礎石建物跡（堂舍）断面図 (1/50)



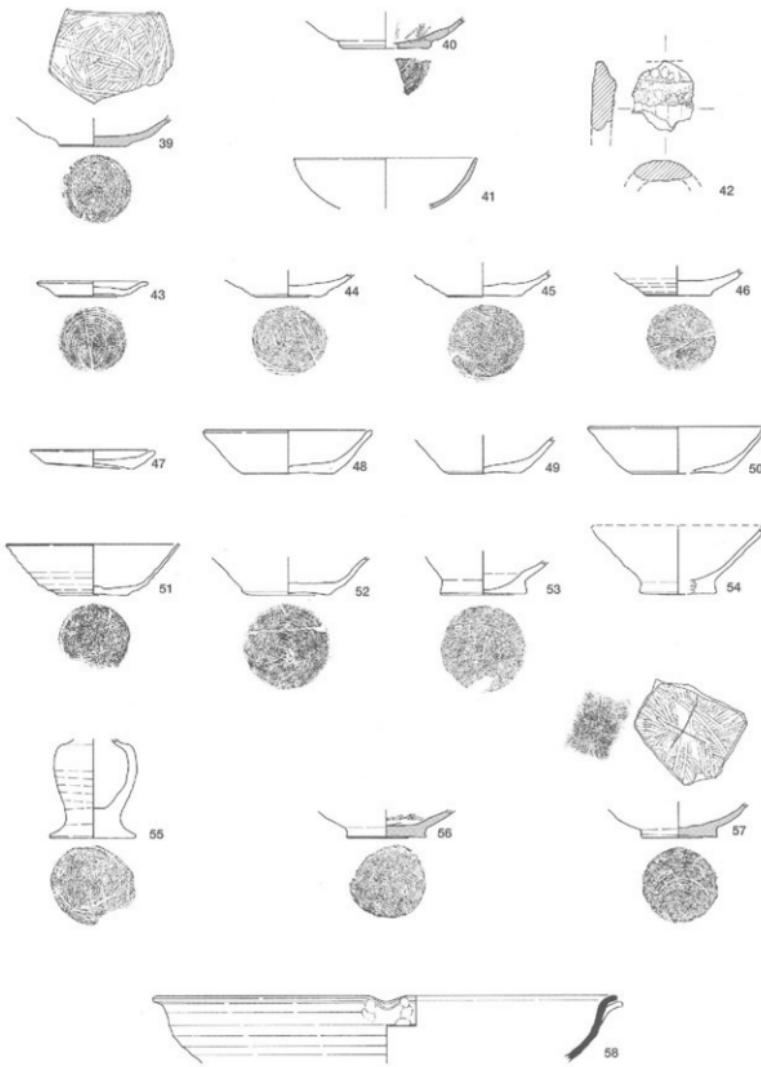
図版16 下段平坦面 下層溝断面図 (1/40) ・土坑平面図 (1/20)



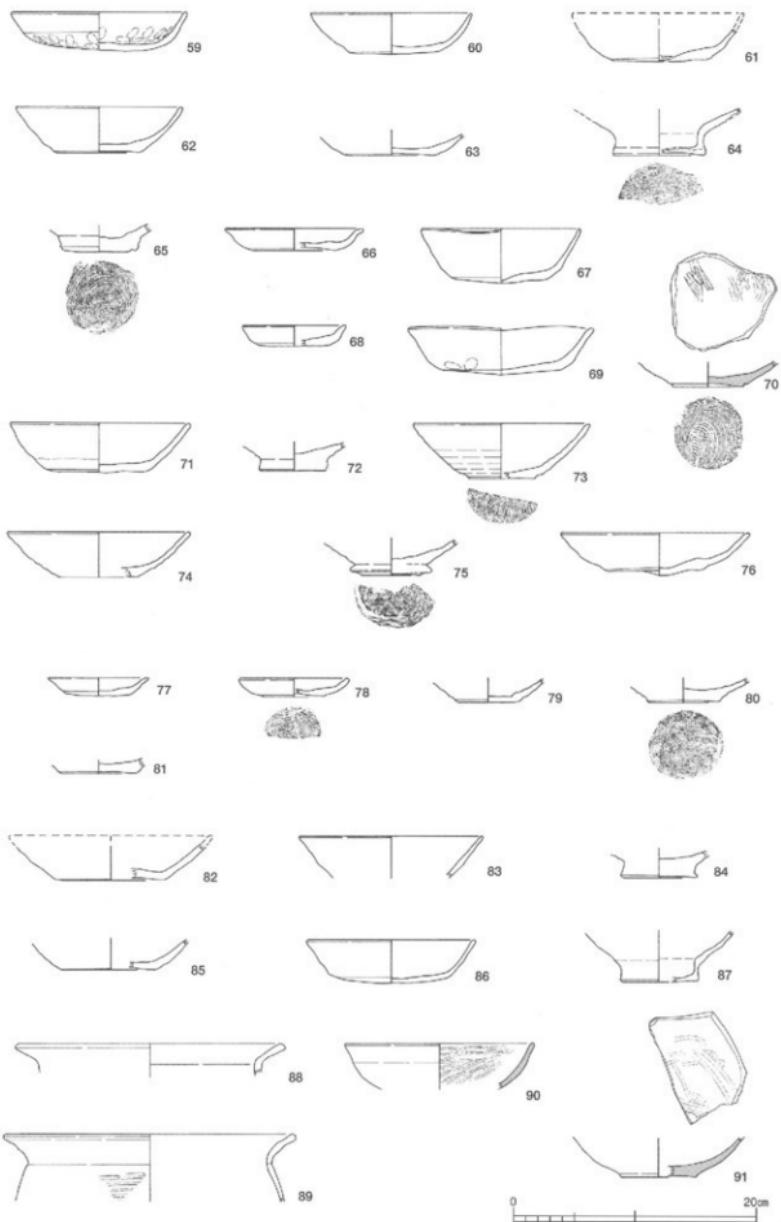
図版17 下段平坦面 下層土坑平面図 (1/20)



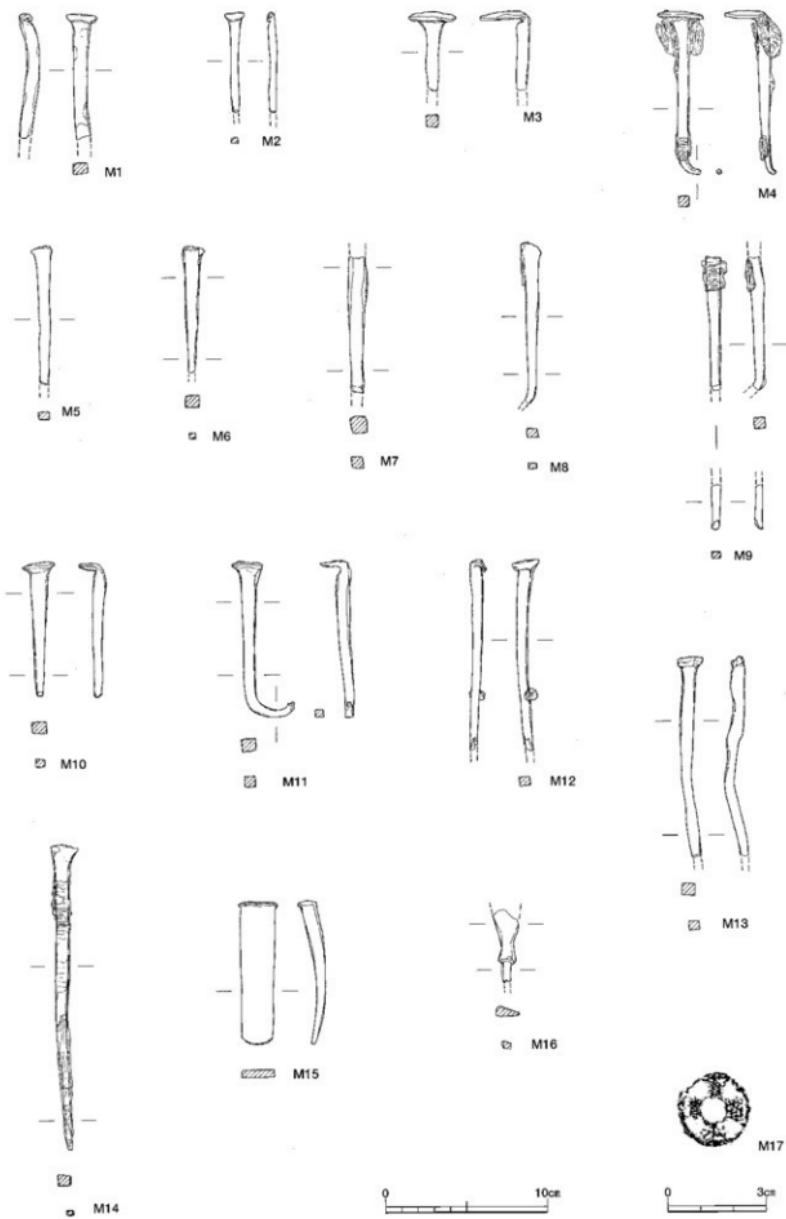
图版18 出土遗物 土器1



図版19 出土遺物 土器2



図版20 出土遺物 土器3



図版21 出土遺物 金属製品

# 写真図版



南から



西から

写真図版2  
遺跡遠景



北西から



西から



西から



南から

写真図版4  
遺跡全景



下段下層検出（北から）



下段下層検出（南から）



真上から

写真図版 6  
上段地区



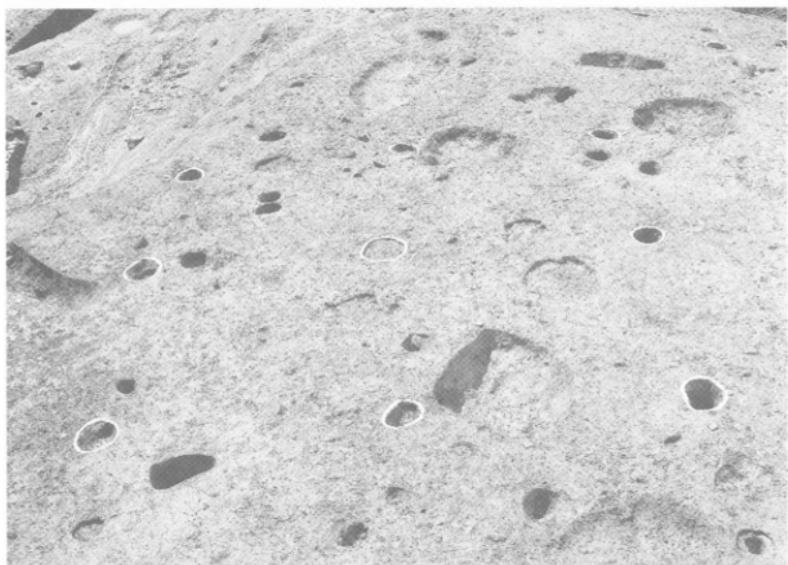
遺構検出状況（北から）



遺構検出状況（南から）



柱穴群検出状況（東南から）



掘立柱建物跡（東から）



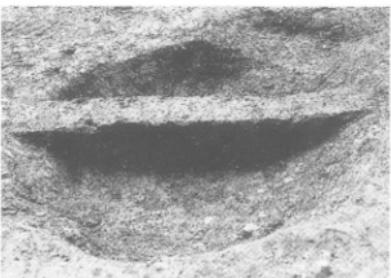
①小石垣（南から）



②小石垣（西から）



③SK33（南から）



④SK35（南から）



⑤SK40（北から）



⑥SK48（南から）



⑦SK46（南から）



全景（南から）



全景（北から）



礎石a



礎石b

写真図版 10

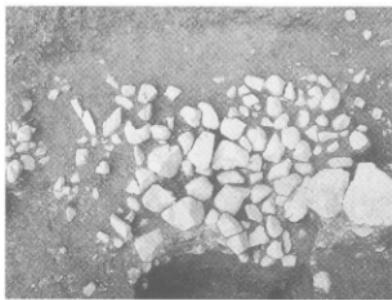
下段平坦面上層 磕敷き



北から



東から



南西部細部（北から）



南西部細部（南から）



堂舎近景（南東から）



堂舎近景（南から）



堂舎近景（北から）



堂舎近景（南から）



堂舎近景（北から）



堂舎近景（東から）

写真図版 14

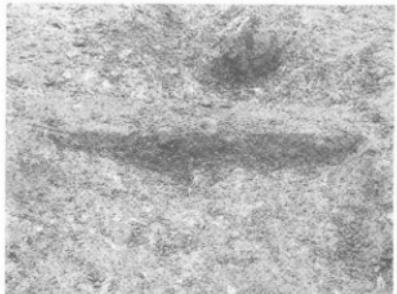
下段平坦面下層



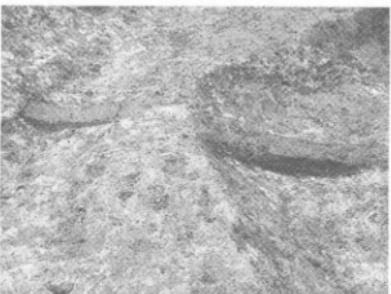
堂舍礎石近景（南から）



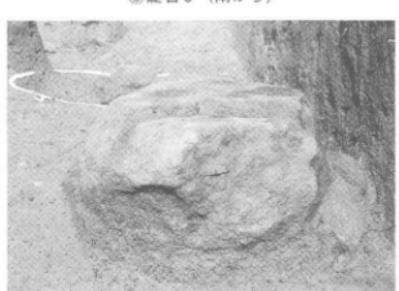
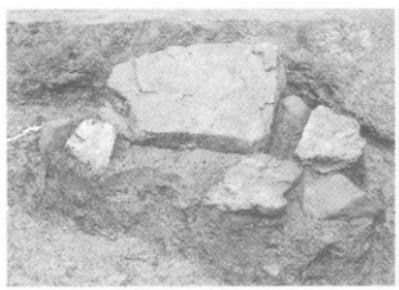
堂舍西側石列（南から）



SD 3 断面A-A'（南から）



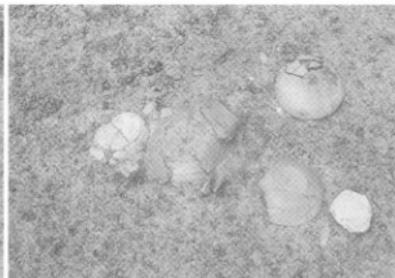
SD 3・4 断面B-B'（南から）



写真図版 16  
下段平坦面下層



①土器a出土状況（南から）



②土器a出土状況近景（南から）



③SD3土器出土状況（東から）



④SK10・11（南から）



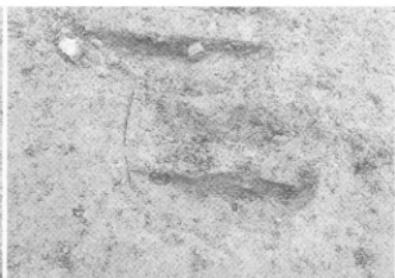
⑤SK19（北から）



⑥SK22（北西から）



⑦SK23（北から）



⑧SK24（西から）



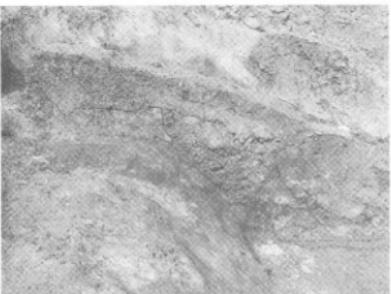
①断面① 下層の断面（西から）



②断面③（西から）



③断面① 12～14層（西から）



④断面②（西から）



⑤断面④上端（西から）



⑥断面④下端（西から）

写真図版 18  
調査風景など



①雪に埋もれた伝平等寺跡遺跡



②雪かき作業



③重機掘削風景



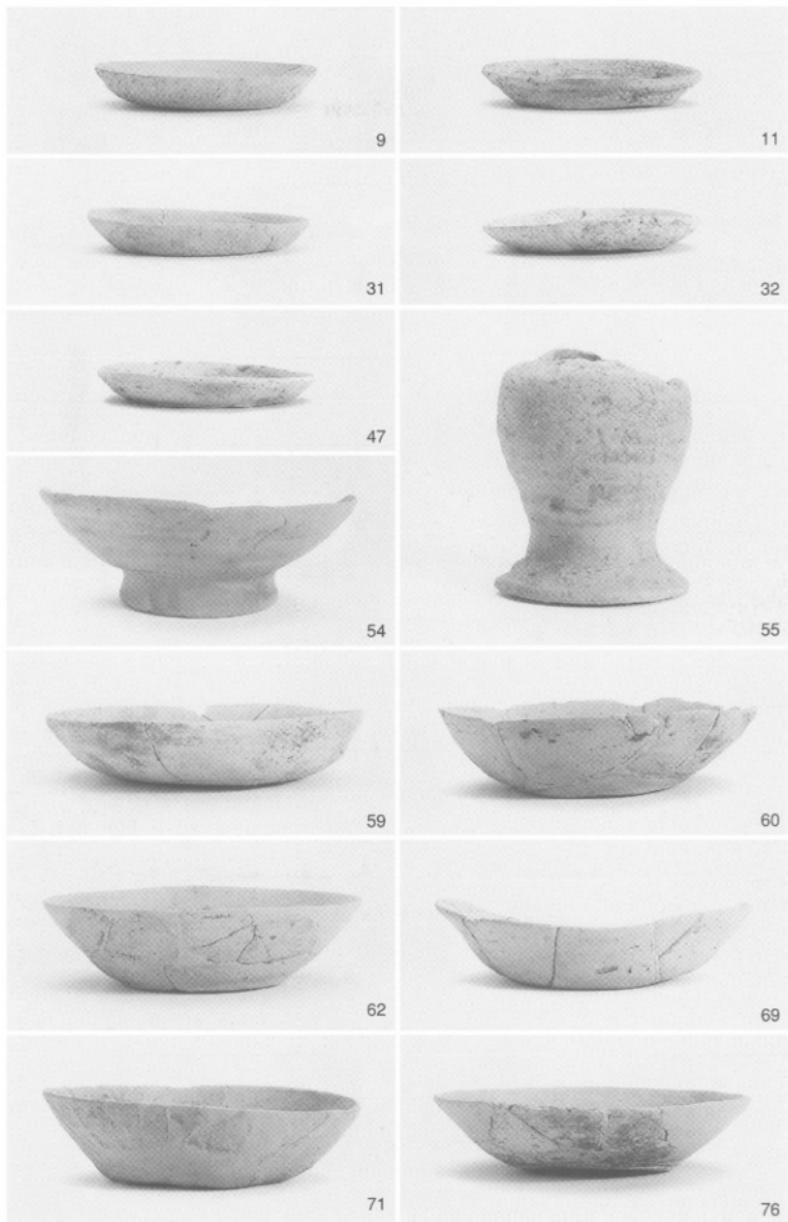
④下段平坦面作業風景

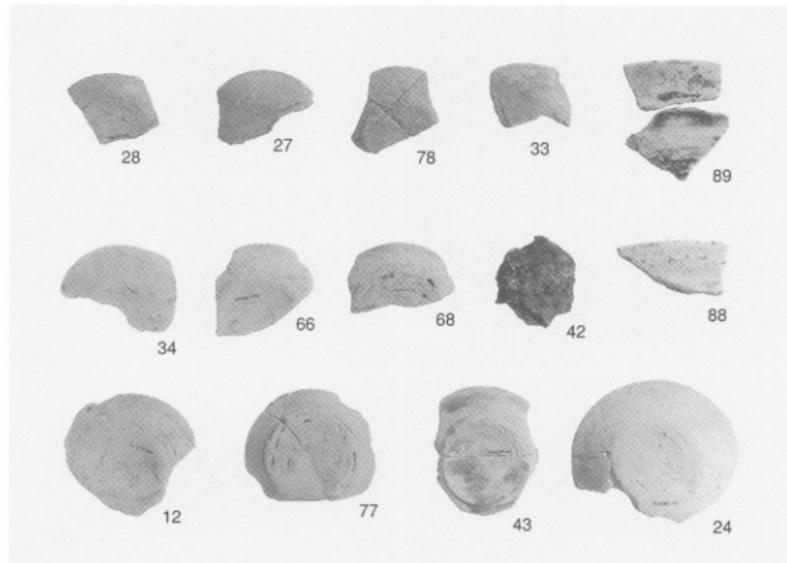
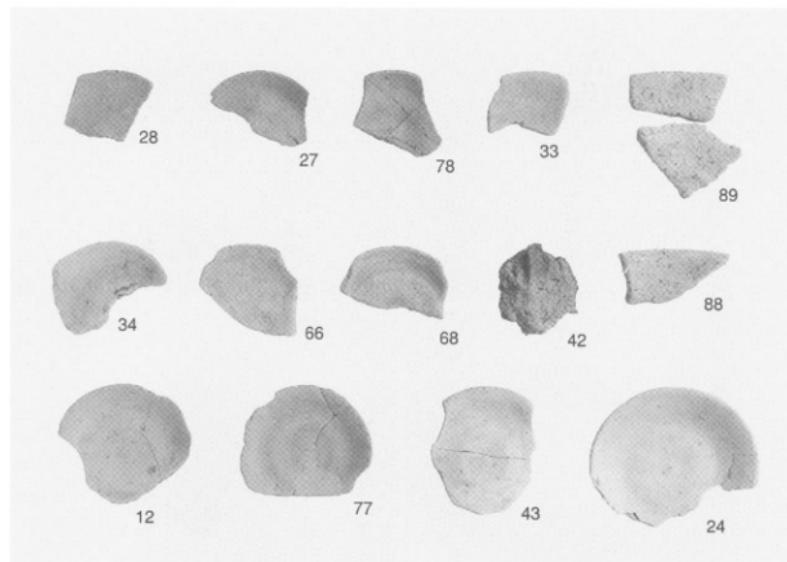


⑤写真足場設置風景

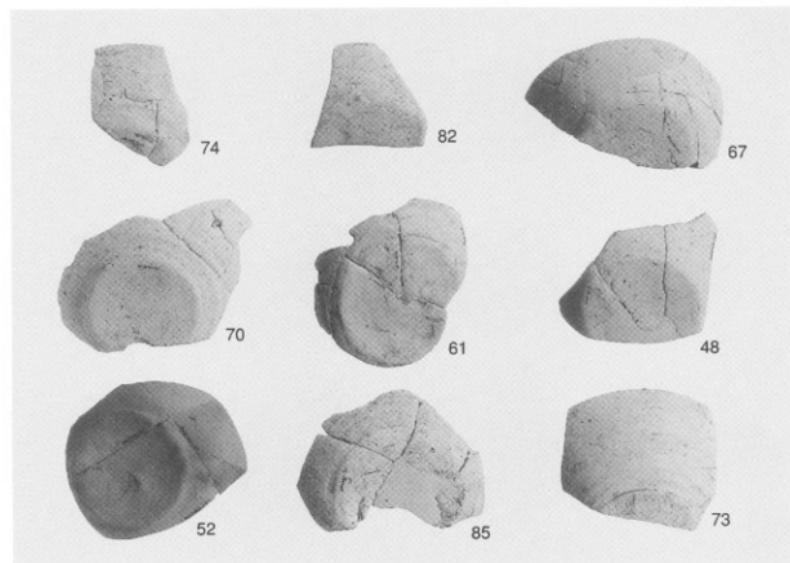
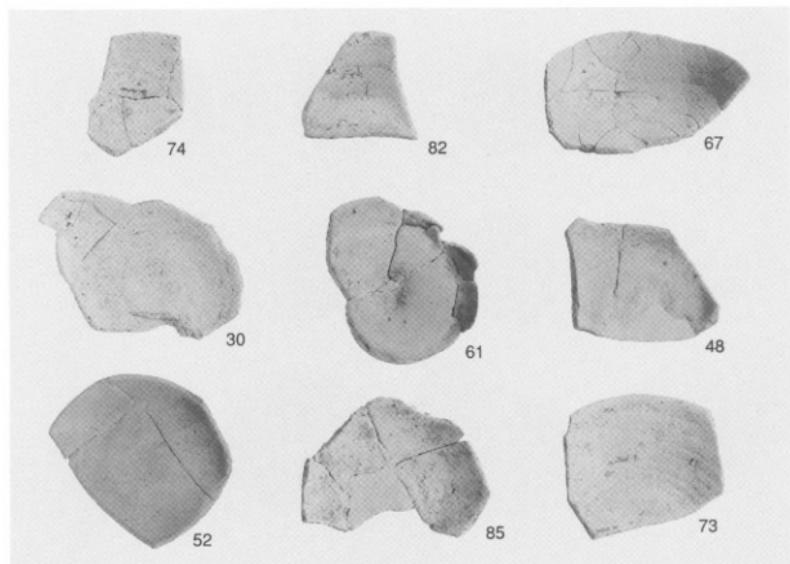


⑥現地説明会風景

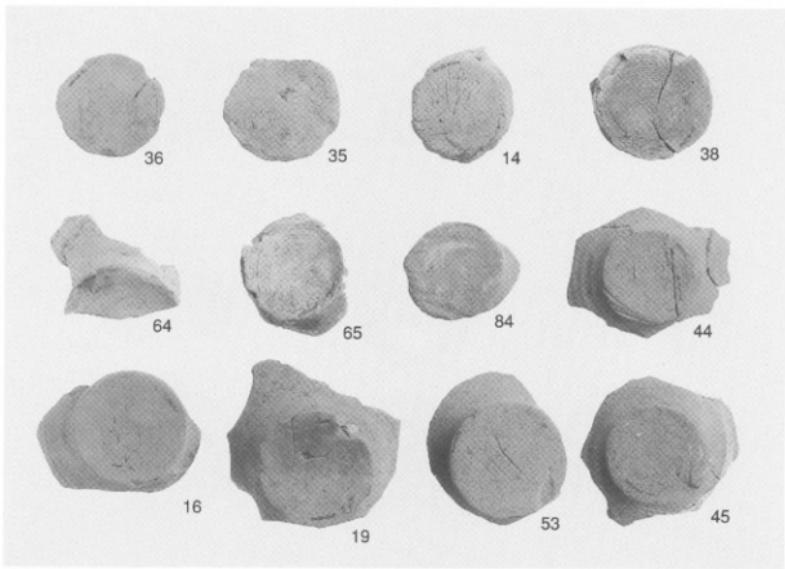
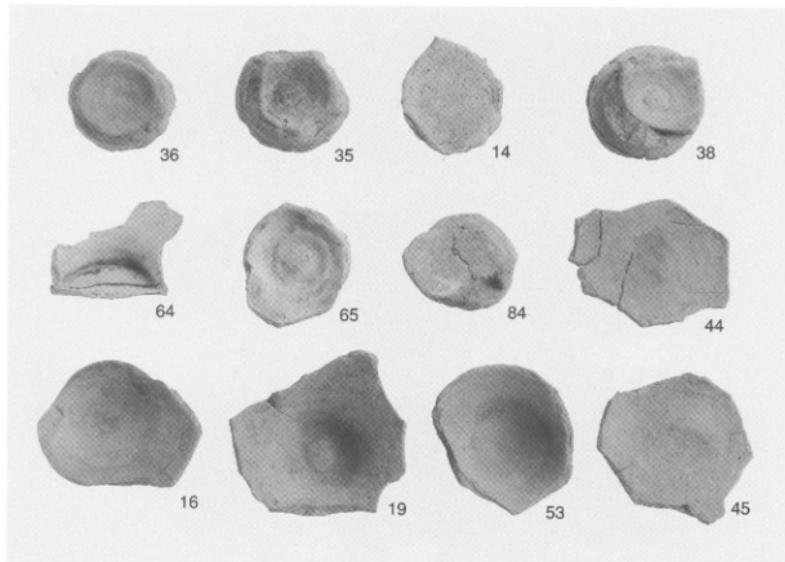




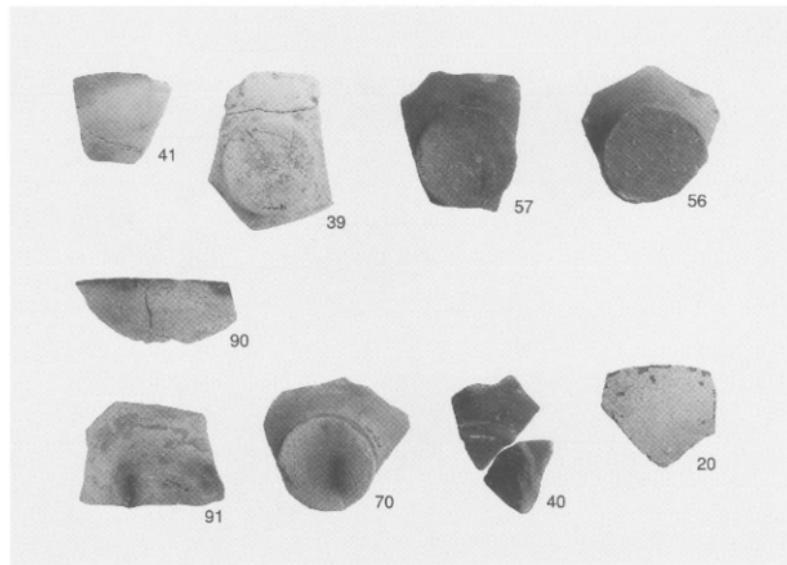
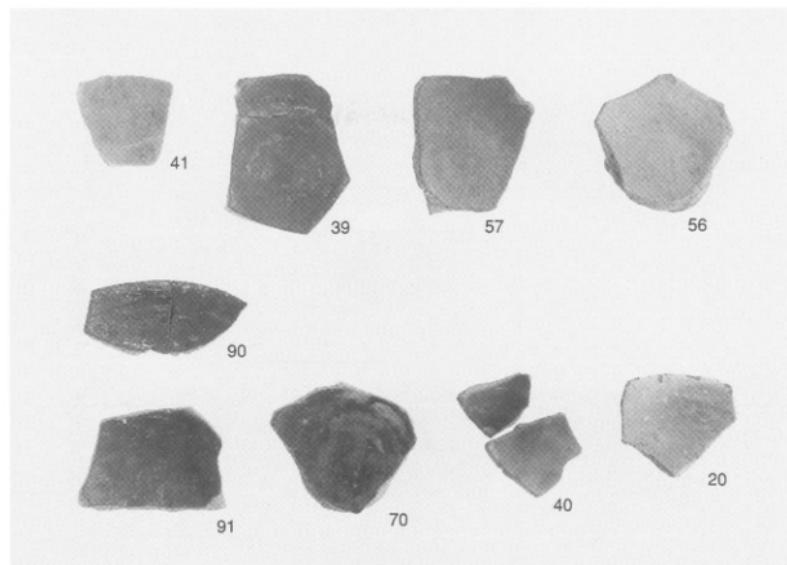
土師器 (2)



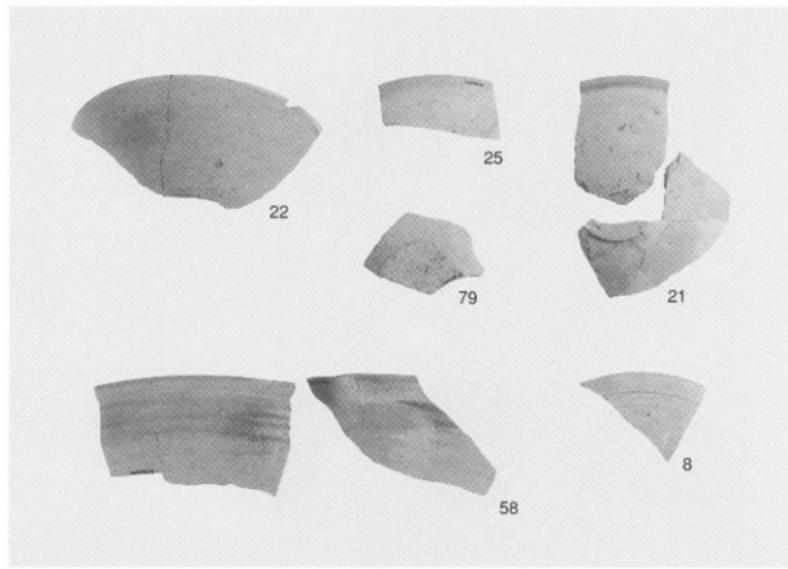
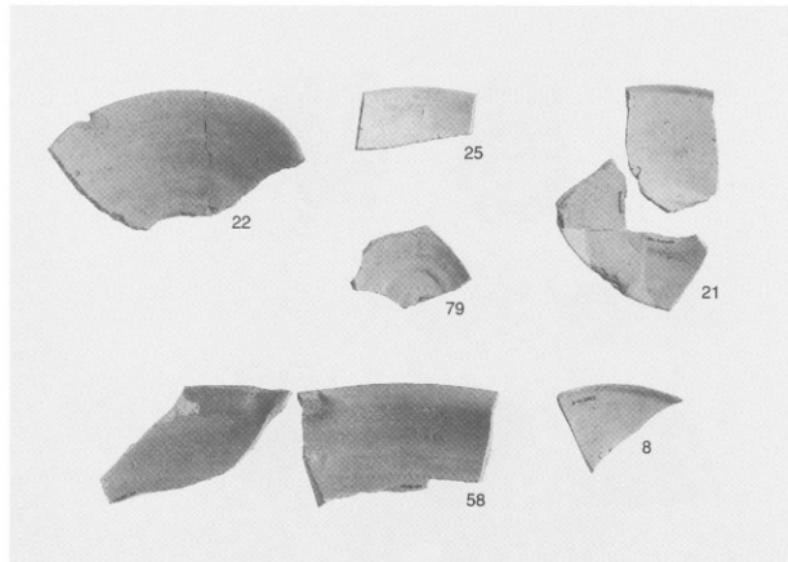
土師器 (3)



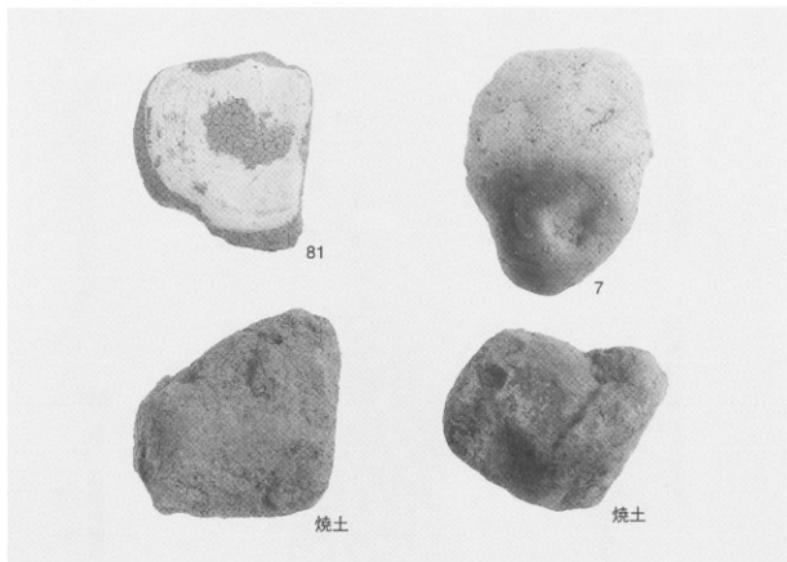
土師器 (4)



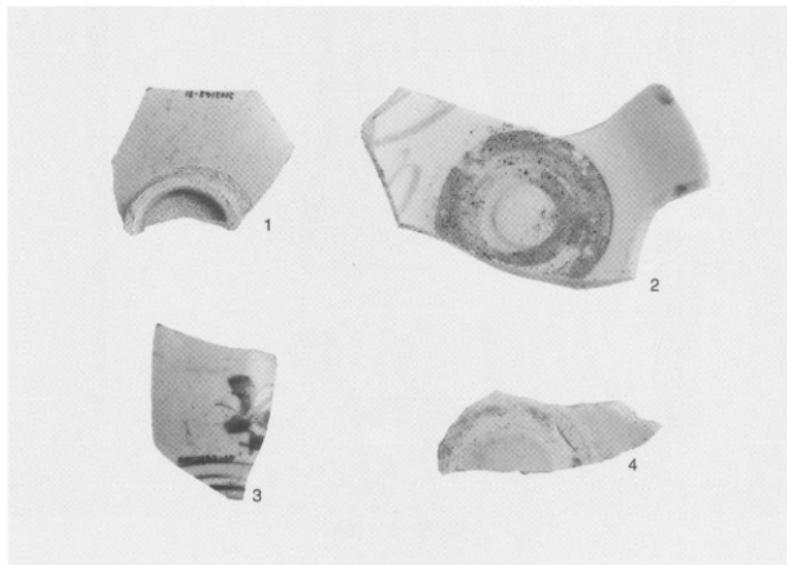
黑色土器・瓦器



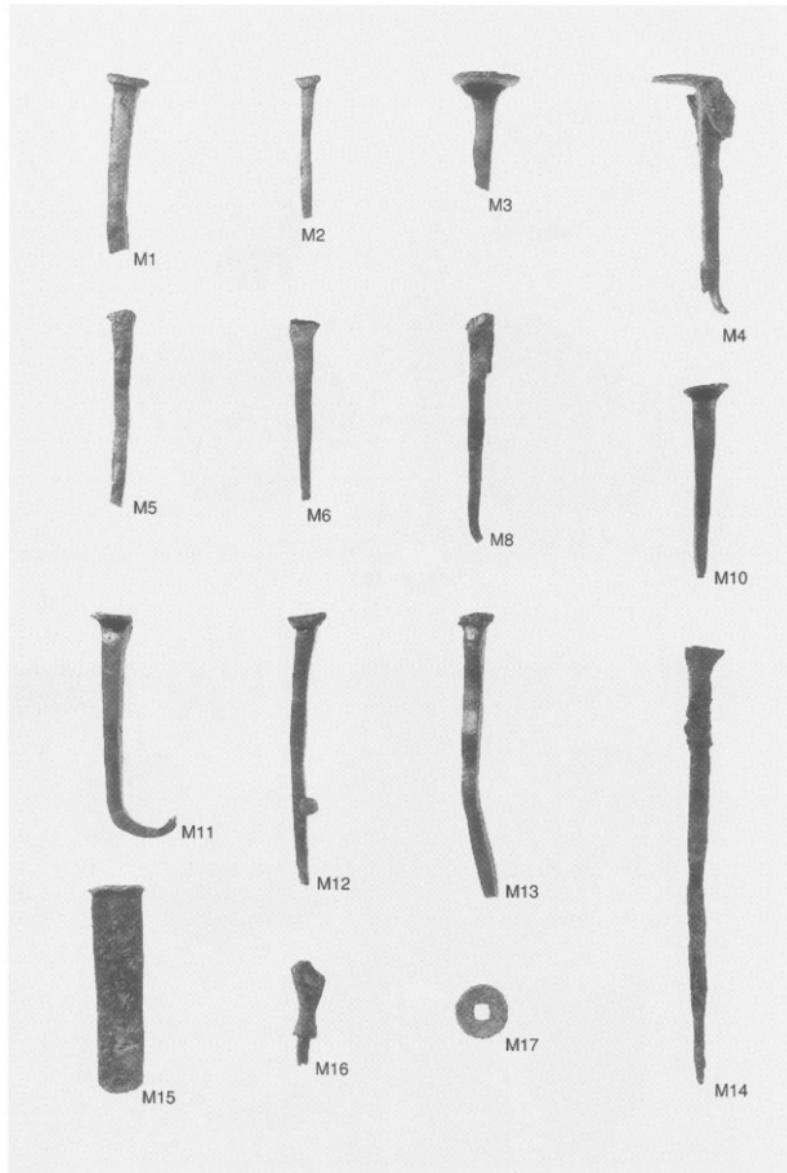
須恵器



土師器・焼土



近世陶磁器



釘・莖・鎧・錢貨

報告書抄録

ふりがな	でんびょうどうじあといせき							
書名	伝平等寺跡遺跡							
副書名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路Ⅰ）建設に伴う発掘調査報告書							
巻次	VII							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第352冊							
編著者名	山上 雅弘							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500 Tel 079-437-5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1 Tel 078-341-7711							
発行年月日	2009(平成21)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード 市・町・村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
伝平等寺跡遺跡	兵庫県丹波市 青垣町遠阪	28223	2001242	35度 17分 58分	134度 58分 54秒	確認調査 2002年3月19日 ～3月20日 本発掘調査 2003年1月20日 ～2003年3月19日	確認調査 59m <sup>2</sup> 本発掘調査 1,455m <sup>2</sup>	一般国道 483号北 近畿豊岡 自動車道 (春日和 田山道路 I) 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
伝平等寺跡遺跡	寺院址	平安時代 末～鎌倉 時代 江戸時代	礎石建物・獨立 柱建物跡・土坑 ・溝	上飾器皿・杯・碗、須恵器碗			寺院の堂 舎を検出	

\*緯度・経度は平成14年4月1日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告 第352冊

## 伝平等寺跡遺跡

一般国道483号北近畿自動車道（春日・和田山道路Ⅰ）建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

平成21年3月31日 発行

編集 兵庫県立考古博物館  
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町500

Tel. 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 富士高速印刷株式会社